ACRYLART

アクリラート別冊2009



The Scholar 20 Perspective

The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊 2009

holbein

ごあいさつ

古来より、人間は絵を描くためにさまざまな素材を工夫してきました。旧石器時代の洞窟壁画では土を砕いた顔料を動物の脂肪や人の唾液などで定着させていたことがわかっており、これがもっとも原始的な「絵具」だといえるでしょう。さらに東洋では膠を使った絵具が発達し、西洋では卵を固着材としたテンペラ全盛の時代があり、油絵具へと主役を交代させた後、近代になってアクリル樹脂絵具が生まれました。絵具の種類だけとっても、現代のアーチストたちはかつてとは比較にならぬほど自由な選択肢を持つに至り、表現方法も多様化し、あらゆる制約からの解放を得ました。しかし新たな自由は新たな悩みも生みます。数ある素材の中で作家の意図を最大限に発揮できるものはどれか、どのような使い方をすべきか、現代では、その選択自体がすでに作家の頭を悩ませる真剣勝負なのです。数世紀にわたって支持されてきた素材は歴史が証明するごとく技法の完成度も高く、ゆるぎない安定感がありますし、一方、新しい素材にはいにしえの画家が想像もできなかったような斬新な技法と未知なる表現の可能性が秘められています。また、これらを併用することで独自の表現を探る作家もいます。こうして材料の発達とともに美術の世界が豊かになってきたことは事実でしょう。

さて、ここに第22回スカラシップ奨学者の作品集をおとどけします。絵具の提供による若手作家の支援として続けている当制度ですが、第一線で活躍、あるいはこれから活躍しようとしているアーチストたちは現在どのような志向で自己を表現し、そのためにどのような素材をどう使っていくのか。そのことも検証しつつこれからも時代とともにアーチストの求める素材を探っていきたいと考えています。

2009年6月

ホルベイン工業株式会社
スカラシップ実行委員会

The Scholar Perspective 20

Contents

第22回奨学者（五十音順）

秋山　幸　AKIYAMA MIYUKI　12・34

あべゆか　ABE YUKA　13・37

一色映理子　ISSHIKI ERIKO　14・40

今井俊介　IMAI SHUNSUKE　15・43

沖　晋吾　OKI SHINGO　16・46

加山　隆　KAYAMA TAKASHI　17・49

桑久保徹　KUWAKUBO TORU　18・52

佐藤純也　SATO JUNYA　19・55

佐藤修康　SATO NOBUYASU　20・58

杉田陽平　SUGITA YOHEI　21・61

田中洋喜　TANAKA HIROKI　22・64

谷口ナツコ　TANIGUCHI NATSUKO　23・67

ナカノ彩　NAKANO SAYAKA　24・70

平井晴香　HIRAI HARUKA　25・73

平林幸壽　HIRABAYASHI YUKIHISA　26・76

藤野未来　FUJINO MIKU　27・79

本間　洋　HOMMA HIROSHI　28・82

森智沙帆　MORI CHISAHO　29・85

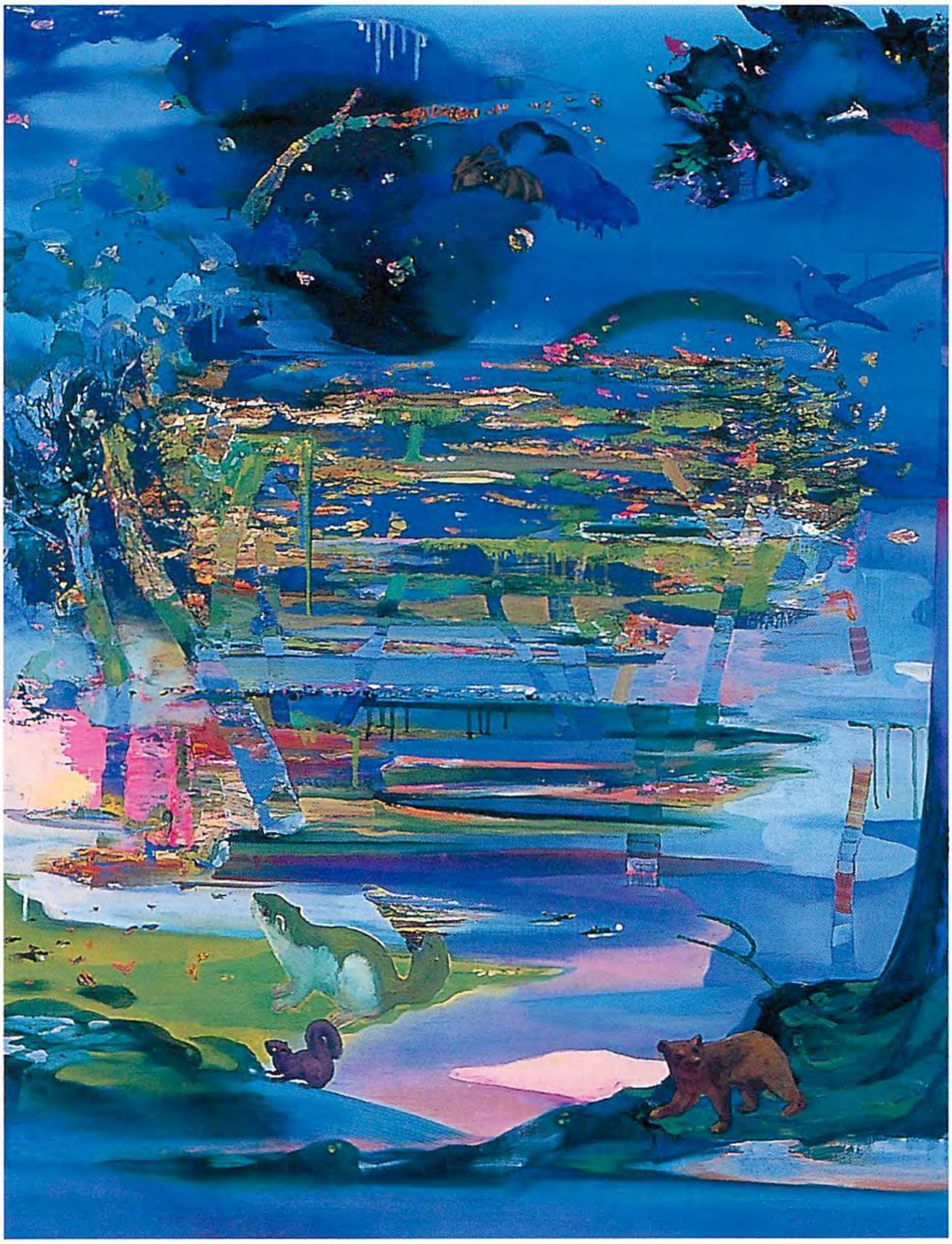
安田　悠　YASUDA YU　30・88

ロバートプラット　ROBERT PLATT　31・91

The Scholar Perspective 20

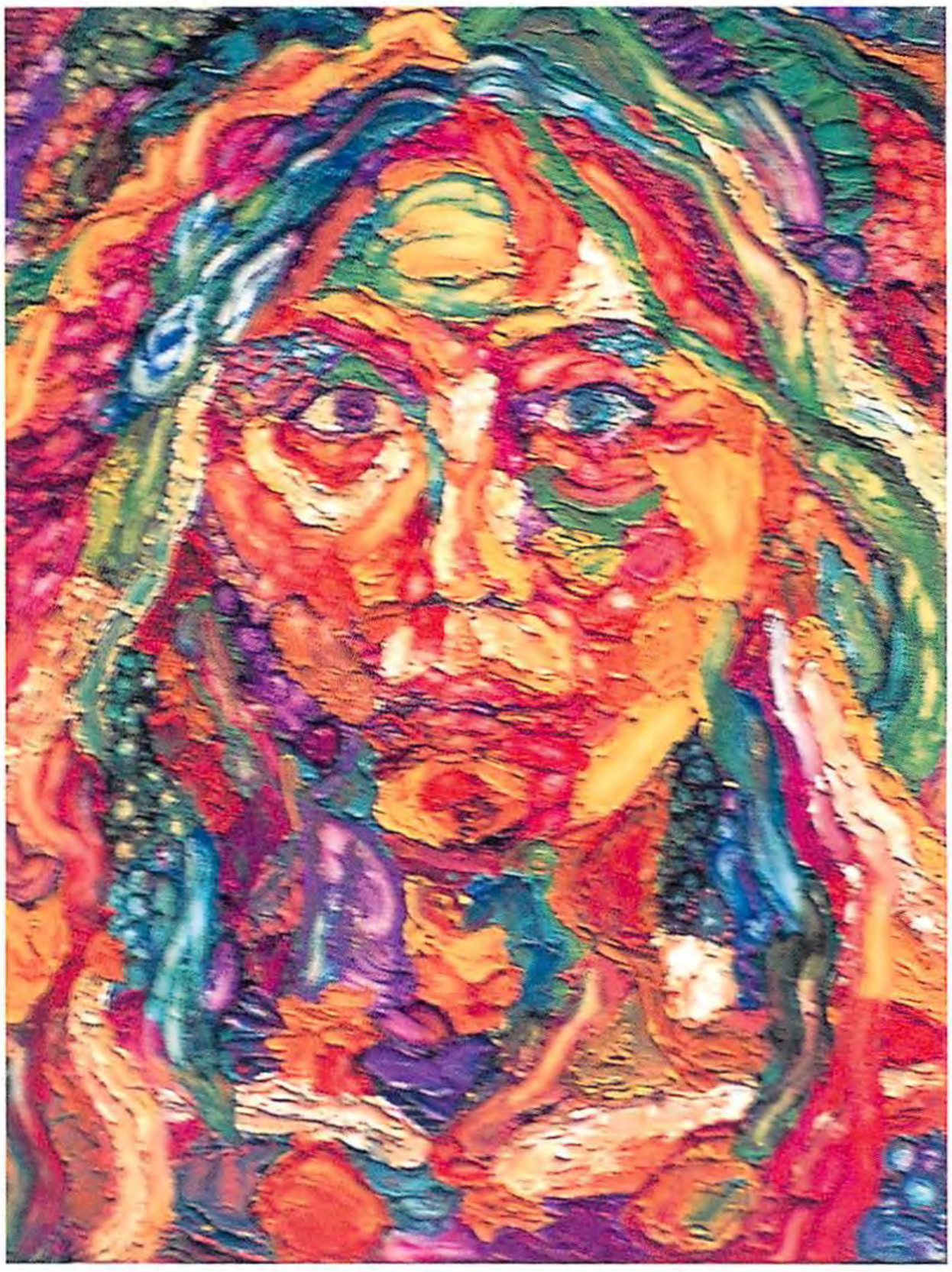
Works

第22回奨学者の作品



秋山　幸

Sky diffuse light
キャンバス、アクリル、油彩
145.5 × 112.1 cm
2008 年
photo by　柳場　大



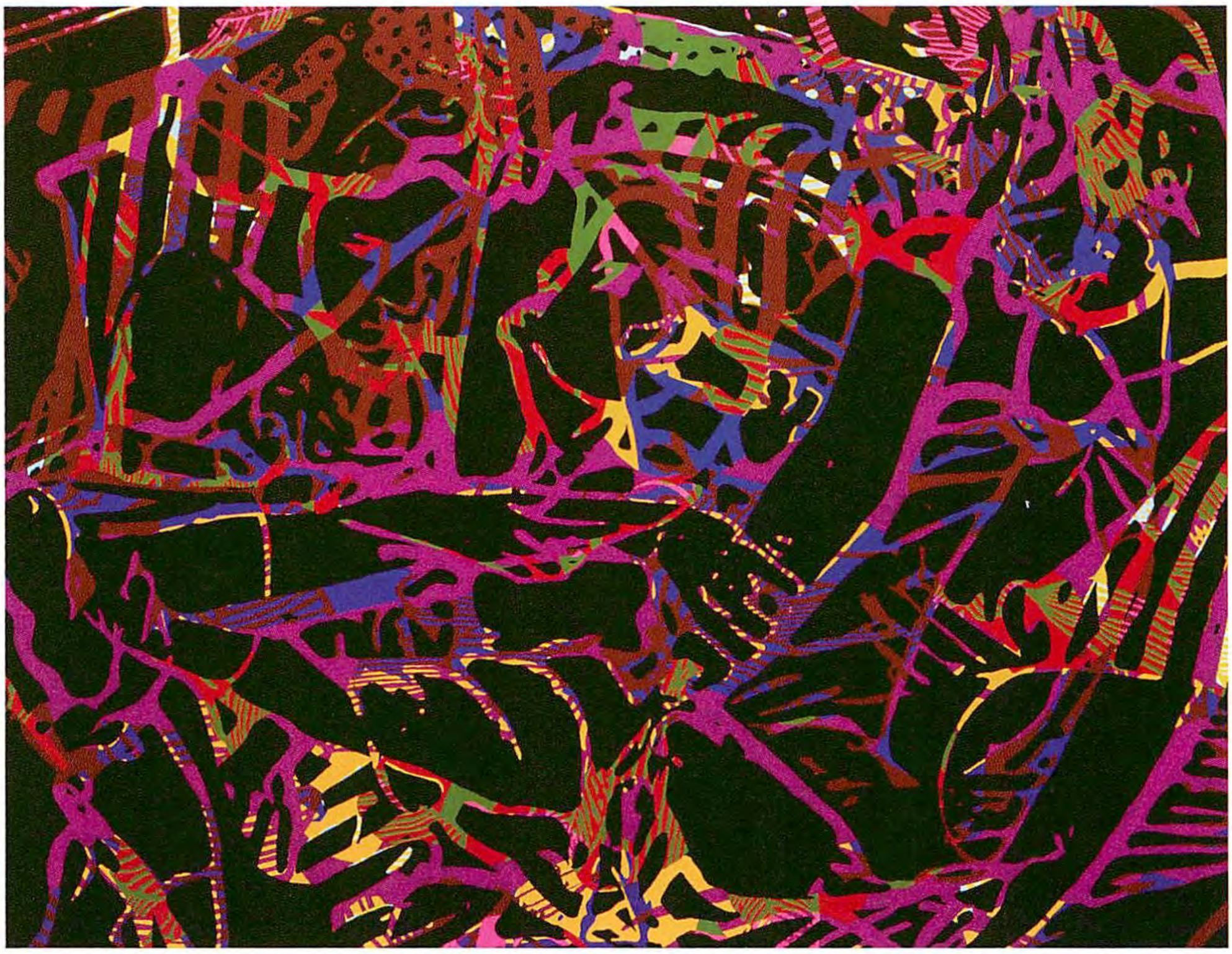
あべゆか

自画像
キャンバス、油彩
60.6 × 45.5 × 5.6 ㎝
2008 ～ 2009 年



一色映理子

うたかた
キャンバス、油彩
130.3 × 162.0 ㎝
2007 ～ 2008 年
photo by　石原さやか



今井俊介

patterns

キャンバス、アクリル

92.0 × 120.0 ㎝

2009 年

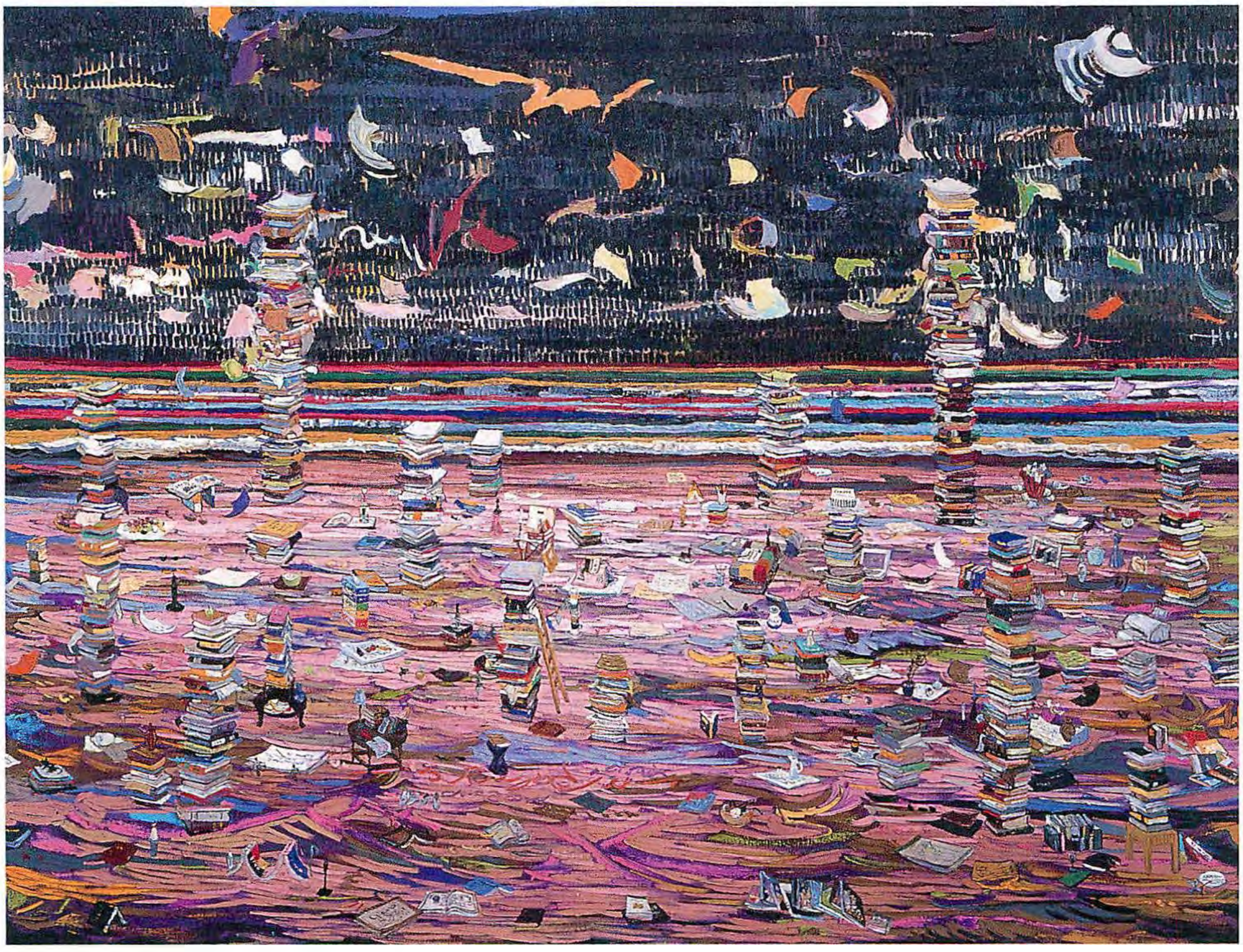


沖　晋吾

untitled
キャンバス、油彩
112.0 × 145.5 ㎝
2009 年

加山　隆

「**2008.7.24**」
パネル、アクリル
103.0 × 73.0 ㎝
2008 年
photo by　唐木孝治



桑久保徹

詩人の庭 2
キャンバス、油彩
194.0 × 259.0 ㎝
2008 年
photo by　Ikuhiro Watanabe



佐藤純也

see,saw / scene
キャンバス、油彩
61.0 × 73.0 cm
2008 年
photo by　丸橋伴晃



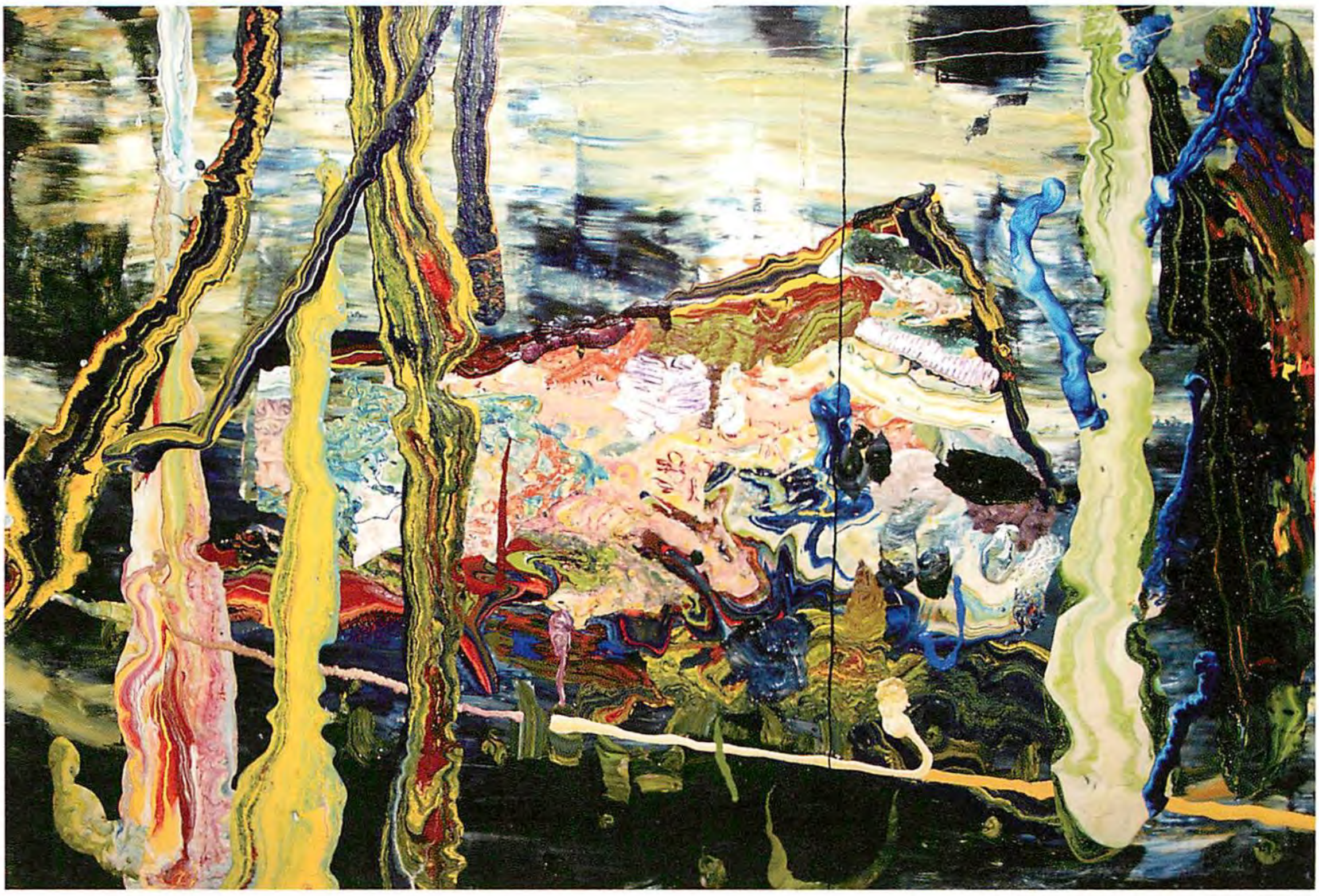
佐藤修康

Crime Continue,Yes NOB

キャンバス、油彩

65.0 × 53.0 ㎝

2008 年

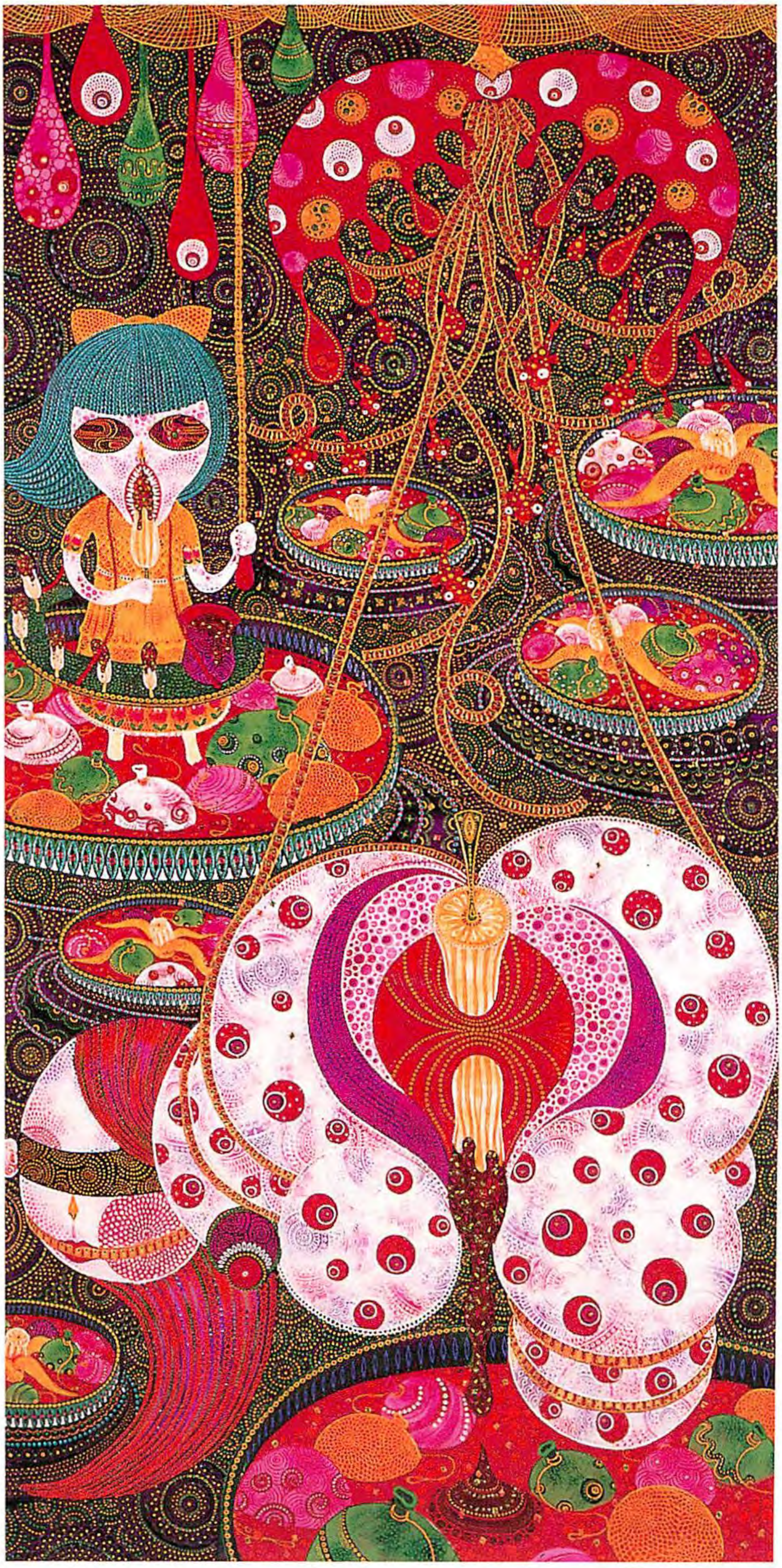


杉田陽平
悲しみの家が静かに美しく咲きて
キャンバス、アクリル
130.0 × 193.0 × 4.0 cm
2008 年



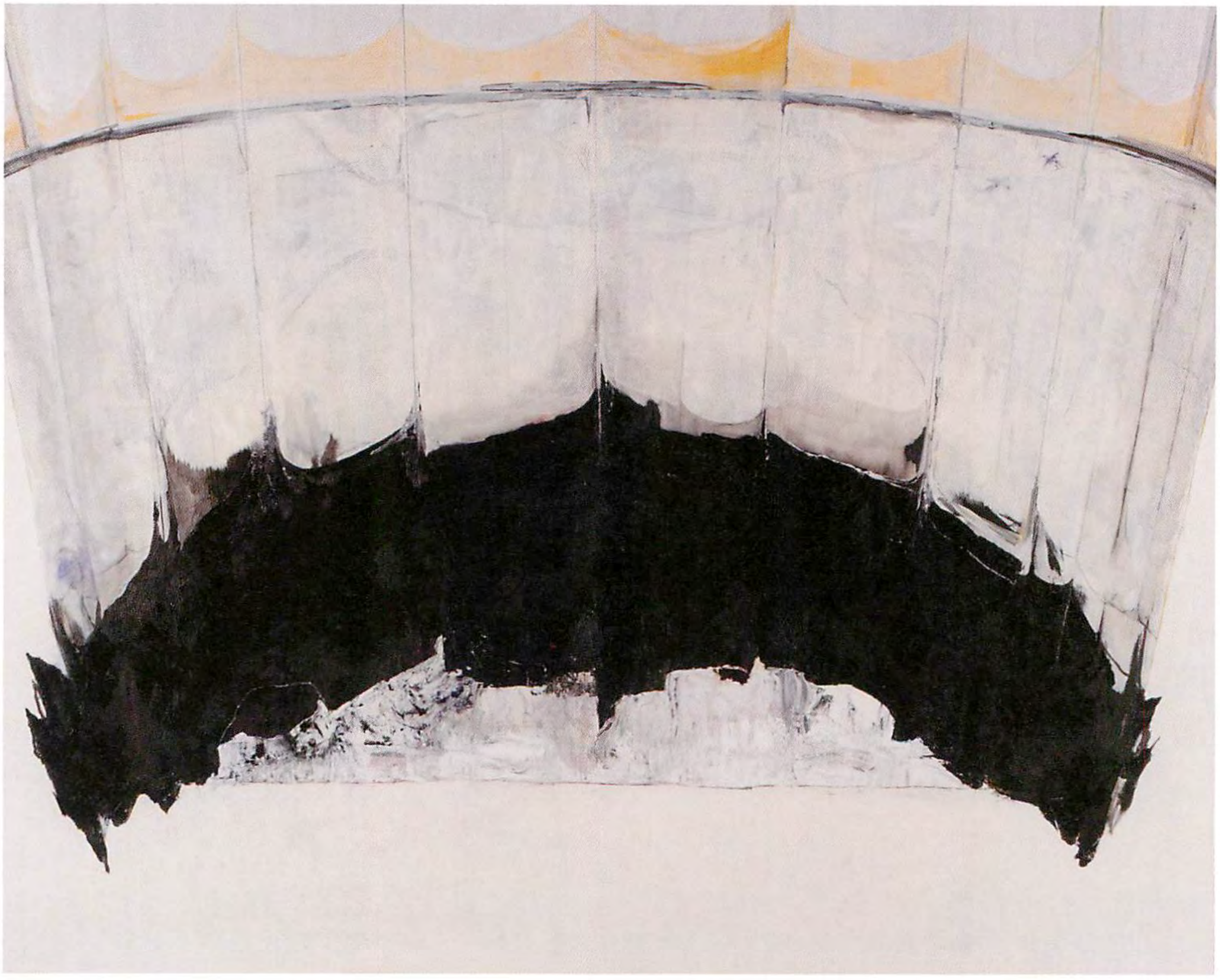
田中洋喜

depth
キャンバス、油彩
116.7×91.0㎝
2009年
photo by　木田光重



谷口ナツコ

大人におやつ －おまつり棒バナナ－
木工パネル、寒冷紗、ジェッソ、アクリル
200.0 × 100.0 ㎝
2008 年
photo by　宮島　径



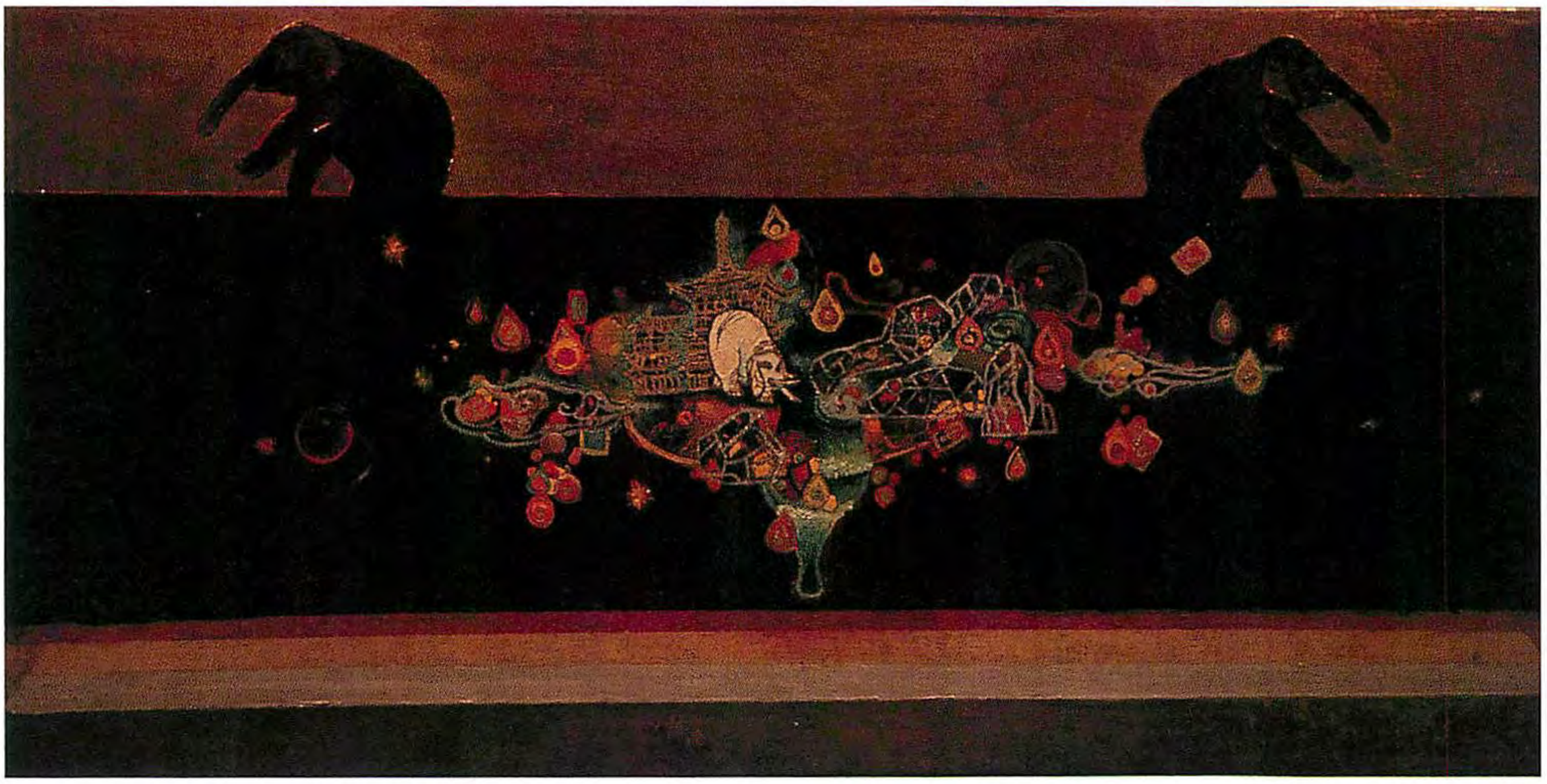
ナカノ彩

glass
キャンバス、油彩、アクリル、ダーマトグラフ
181.8 × 227.3 ㎝
2009 年
photo by　加藤　健



平井晴香

haregi
キャンバ、油彩
162.1 × 112.1 cm
2009 年



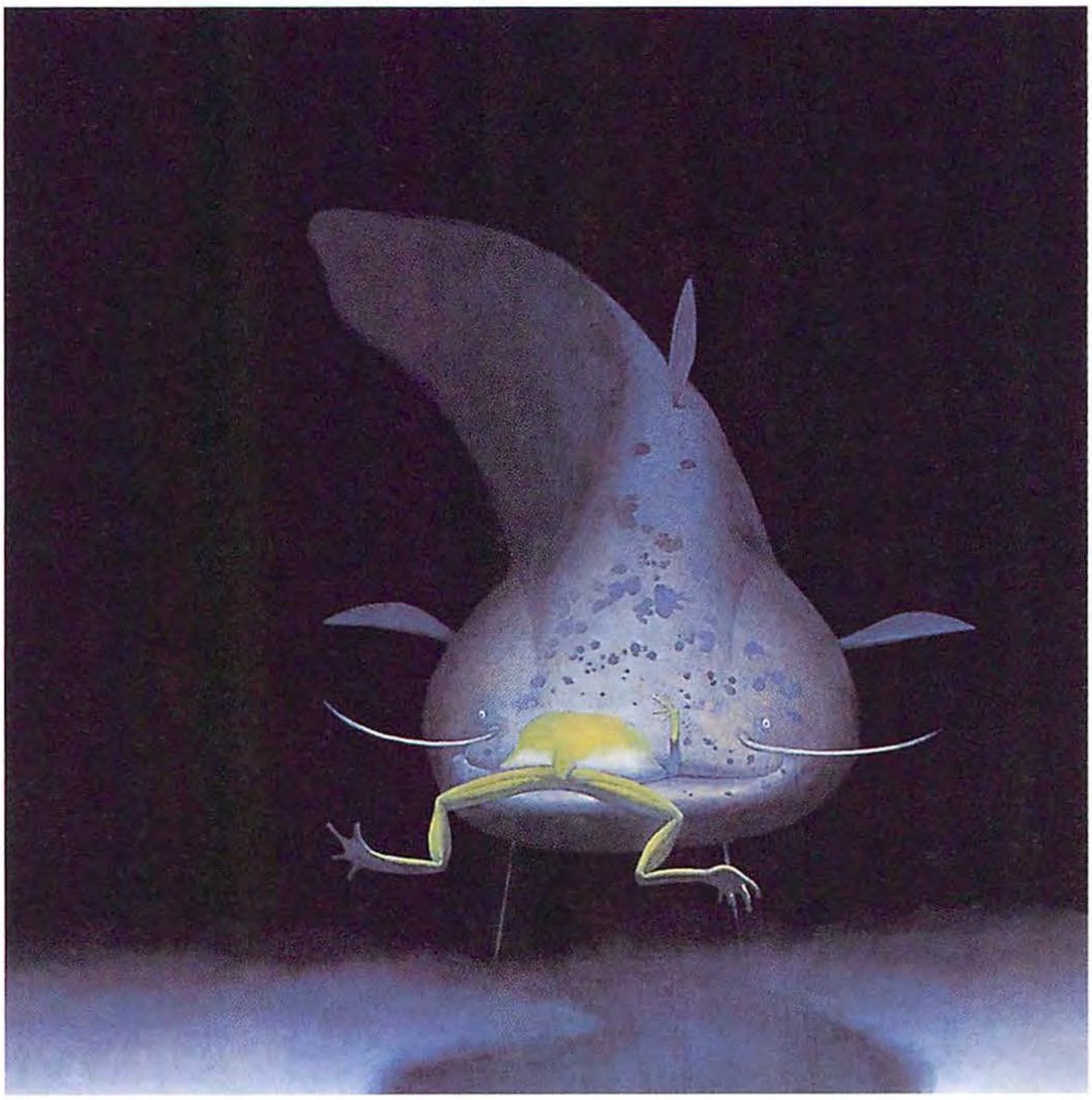
平林幸壽

Pure land in the cepth mind No. 3 Holy white elephant No. 1
木材、アクリルウレタンスプレー、アクリル、油彩、オイルパステル
45.5 × 91.0 cm
2008 ～ 2009 年



藤野未来

RIGHT tree
紙、パステル、鉛筆
22.0 × 27.0 ㎝
2009 年
photo by　柳場　大



本間　洋
よのなか
パネル、アクリル、テンペラ、油彩
100.0 × 100.0cm
2008 年



森智沙帆

UNTITLED
パネル、油彩
182.0 × 227.0 ㎝
2008 年
photo by　村上真之介



安田　悠

Link
キャンバス、油彩
181.8 × 227.3 ㎝
2008 年
photo by　Shota Sato



ロバート・プラット

Stein Forest(ii)
キャンバス、油彩
130.0 × 194.0 × 3.0 cm
2009 年

The Scholar 20 Perspective

Report

第22回奨学者のレポート

AKIYAMA MIYUKI

秋山　幸

ミクロマクロ

絵画を描く時、真っ白な無のキャンバスの上に絵の具が浮遊して広がっていくことが、まるである一つの星の誕生のように感じられ、その感覚を持つことが不思議でならない時がある。

全ての事象の始まりは、ある空間としてそこに存在している。例えば一本の木が全体となり森になるように、その一つ一つの粒子が線となり空間をつくる。

そして、森の中に足を踏み入れなければ木は見えないし、木を見ていれば覆いつくされた背後の森は見えてこない。

『自我』と『他者』の関係を変化させることによって、同一空間上で一つの世界である にもかかわらず、そこにはまた違う空間が浮かび上がり、異なる世界が隠されている。

その異なる世界が『視点』『記憶』『経験』『心理』と結びつき、潜在的なイメージによって組み立てられ、肉体となり浮かび上がり、空間が動いて変化していく。

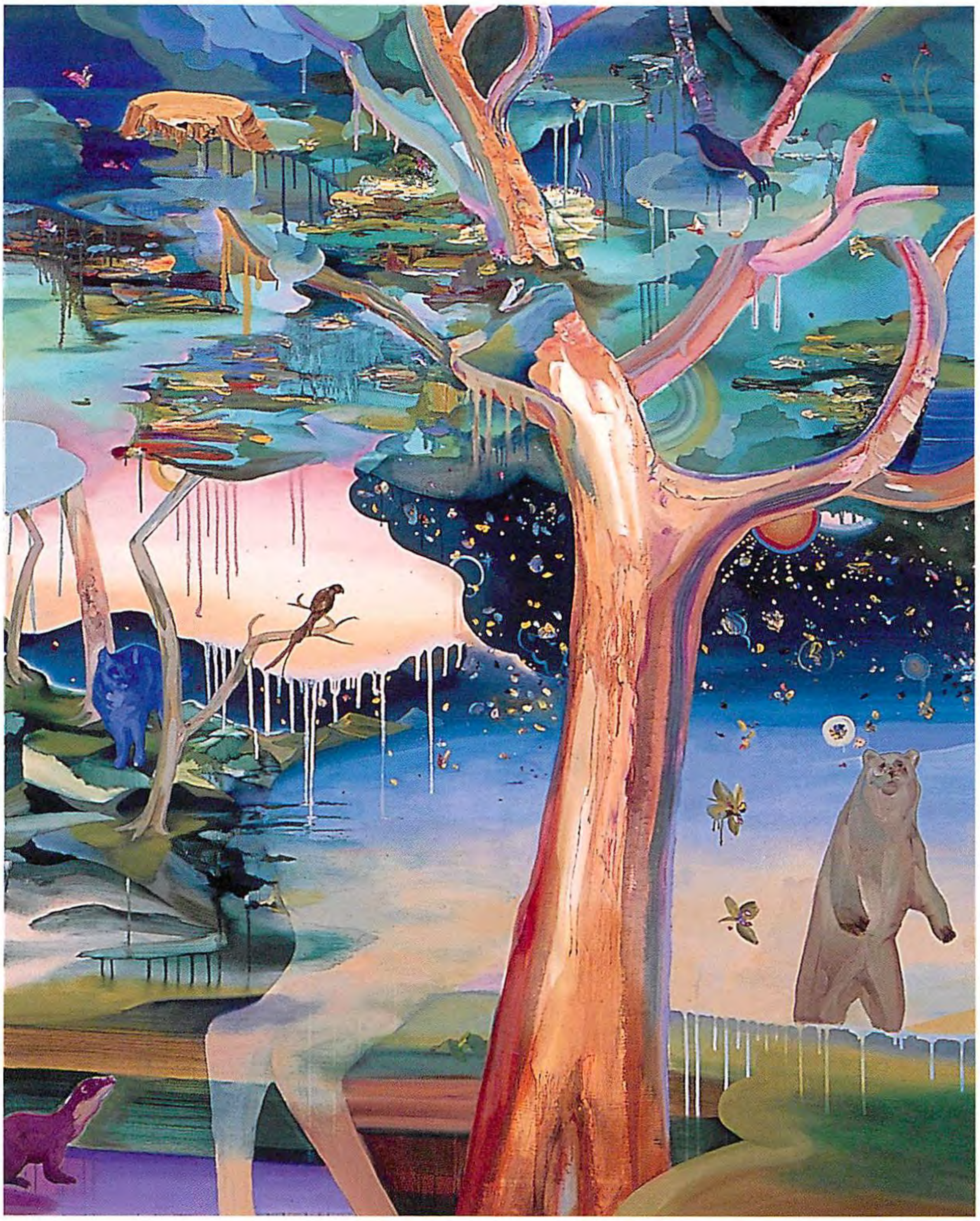
作品の中で、私が多くの動物の形を用いるのは、有機的な肉体が『成長』『朽ちる』など変化する時間を有し、時間的連鎖によって、脈々と古代の風景を受け継いでいるように感じるからである。

偶然と必然の中で、進化と変化を繰り返して来た証である生物或いは事象は、私が絵画を作り出す時に絵の具を塗り、それを繰り返すことと同じように感じられる。絵画空間に広がる触れられない存在が、触れられる実空間の存在と重なる。

私は地球が丸いことは本でしか知らないし、ミトコンドリアが自分の体の中にいるなんてことは実感できない。

空にはなぜ角がないとか、なぜ体の怪我は治るのか、生活の中ではそれすらも、表面的な一部でしかなくて、地表の奥深くにはマグマが沸々とわき起こり、体は酸素を取り込み、血を巡らせている。

本質はどんなに分かっていても分からないもので、だからこそ空間が存在することの秘密を解き明かしたいと考えるし、何度も確かめてみたいと思う。



Eternal island
キャンバス、アクリル、油彩
194.0 × 131.0 cm
2008 年
photo by　柳場　大



ミドリムシの作戦
キャンバス、アクリル、油彩
112.1 × 145.5 cm
2008 年
photo by　柳場　大



秋山　幸

1980 年　岡山県生まれ
2004 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2006 年　武蔵野美術大学大学院造形学部絵画コース修了

個展
2008 年　magical ARTROOM ／東京

グループ展他
2004 年　DETEN　青山スパイラル／東京
2005 年　新宿展 2　新宿眼科画廊／東京
2006 年　WORM HOLE episode 2　magical ARTROOM ／東京
INDEX #2 -Life Style-　トーキョーワンダーサイト／東京、ART ZONE ／京都
HIROMI YOSHII ／東京
2007 年　遊戯室（中崎透 + 遠藤水城）／茨城
2008 年　IF YOU'RE HAPPY CLAP YOUR HANDS　Andrew James ART ／上海［中国］
Formlees Life　村住宅 1 階／石川

あべゆか

ABE YUKA

いのち

私は「いのち」を描きたい。

命の持つ存在感、躍動感、生命力、情熱。美しさ、力強さ、矛盾、儚さ。沢山の命の重さや価値は全て平等であるということ。無駄に存在する命など一つもなく、無駄にしてよい命などない。

人間、動物、植物。地球。宇宙。この世界は沢山の命であふれている。それは当たり前のことのようでとても特別なことであり、長く深い歴史の中で数え切れない程の奇跡が重なり、私達の命が今、此処に存在している。

生きるということは何なのか。

「いのち」とは一体何なのだ。

生まれて二十年余り、しかも「命」として は比較的歴史の浅い「人間」という生き物として生きる私がいくら考えを巡らせど、到底、奇跡の一つも解明出来やしない。

それでも私が思うに、もしその「理由」が絶対的に存在するとした場合、それは言葉や思考の及ばない領域に位置するのではないか。そしてそこには恋愛や芸術も位置する。

人間は特に「知りたい」生き物であることに対し、結局謎は謎のままなのだ。そして謎が謎のままに存在する為に、命には寿命があるのではないか。重要なのは知ることではなく考えることであり、それこそが模索、試行錯誤することによって生まれるものが美しいという事実とも成り得る。

それと同時に考えれば考えるほど、「絵を描いて生きていきたい」と思う自分が恥ずかしく思え、胸が熱くなる。

なんと贅沢な行為や私考だと。

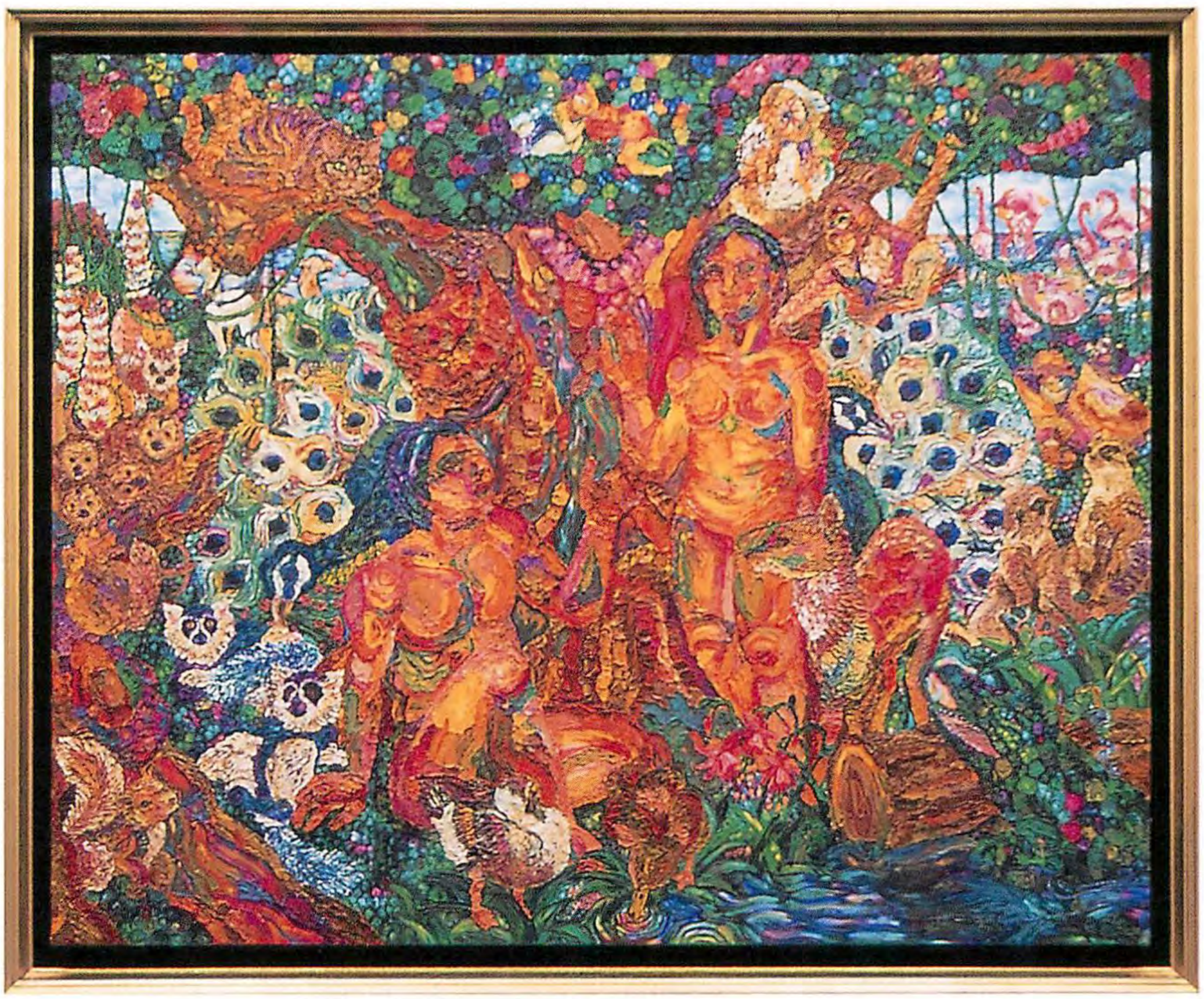
自分はとても恵まれていて、幸せな環境で温々と育っていることを思い知らされる。

それでも、私は絵を描きたい。

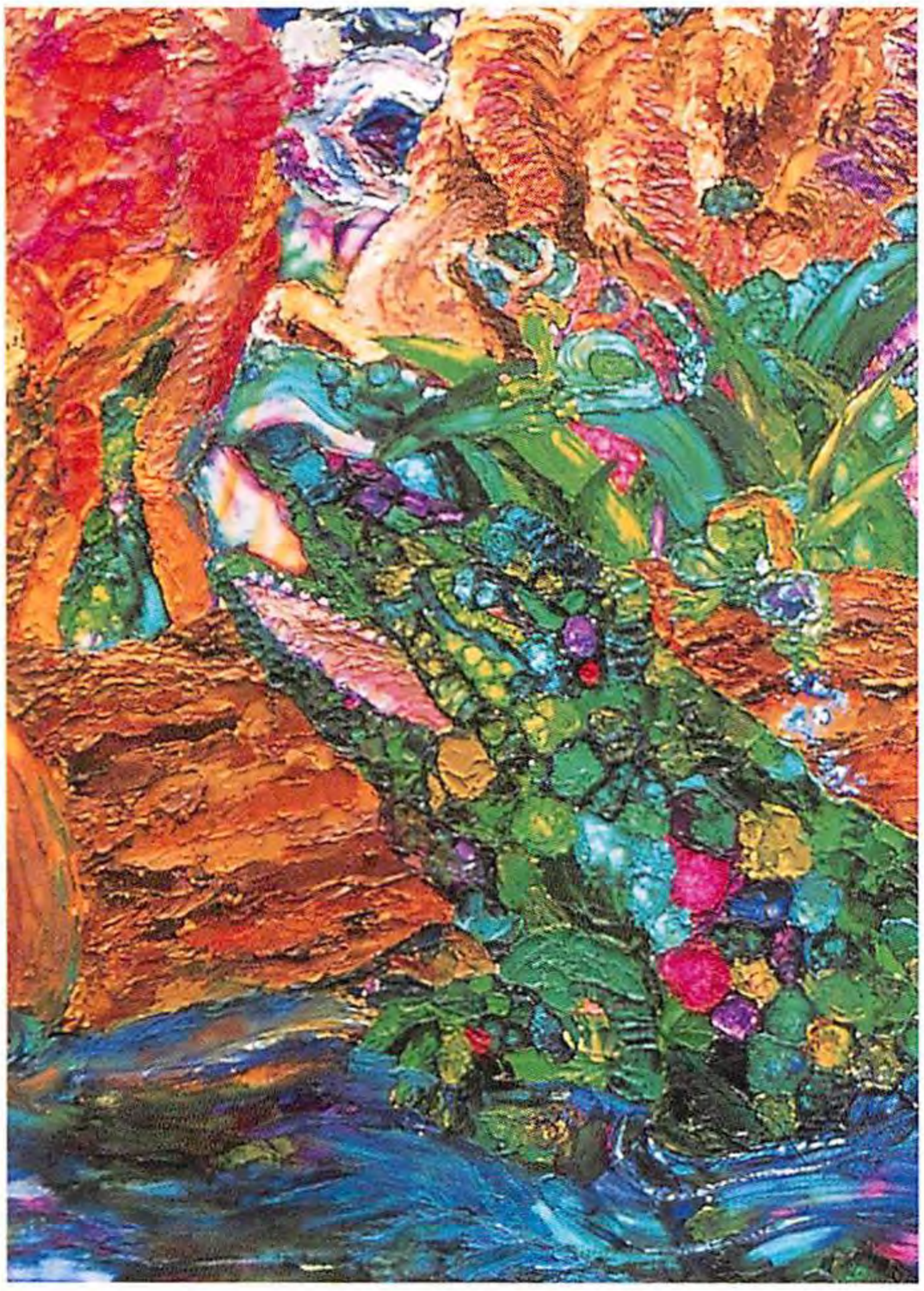
故に最も欲するものはいつも手に入らず、肝心なことはいつも思考の範疇外なのである。

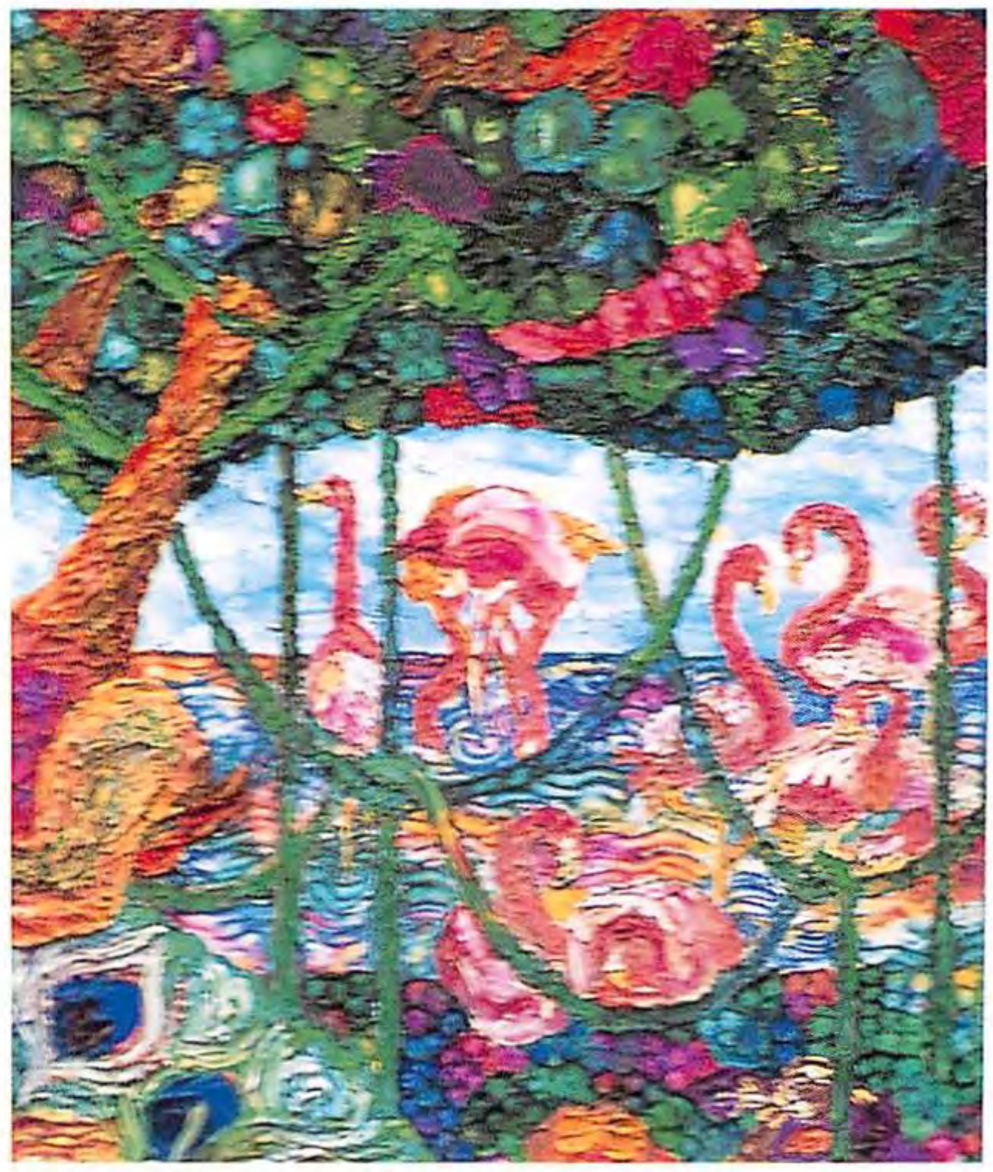
だからこそ、私は絵を描きたい。命を感じ、生き、
「いのち」を描くことで、
伝えたい。
そして「絵を描きたい」と思った時に絵を
描くことが出来ることの幸せ、その有り難
味を決して忘れてはいけない、と自分に強
く言い聞かせる。
弱音を吐く権利などなく、立ち止まってい
る暇もない。

そして、そうさせてくれる周りの環境、私
を産んで育ててくれた母、日々支えてくれ
る友人、恋人、猫達。
モデルになってくれる全ての命達。
私の描く絵を好き、と言ってくれる人々。
全てに感謝することを忘れずに、死ぬまで
絵を描き、一生懸命に生きていきたい。



いのち
キャンバス、油彩
182.0 × 227.3 × 5.6 ㎝
2008 ～ 2009 年





いのち（部分）
左：ワニ
右上：フラミンゴ
右下：孔雀



あべゆか

1986年　東京都生まれ
2009年　東京藝術大学美術学部絵画専攻油画卒業
　　東京藝術大学大学院修士課程絵画専攻油画在学中

一色映理子

ISSHIKI ERIKO

光と時間と温度と

作品に登場する2人は、私の実の祖父母です。

2人を描き始めて7年。

7年という歳月は私と年老いた2人とは同じものでありながら、異なるものなのです。

老いるということ—。

つまり、生きる、ということ。

2人を描いていると、不思議と自分自身が今いる場所、記憶、普遍的な光、時間の流れ、地球の呼吸—。

色々な意味での『自然』に包まれていると感じるのです。

また、色や2人のカタチ、光と対話しながら制作しています。

そのうち、自分の中でも光が穏やかに発光する瞬間が訪れます。私はその瞬間が訪れるのを、いつしか待つようになりました。

幼い頃からいつもそこにある光を感じていたような気がします。

最近は祖父母が使っている部屋の温度や空気にも興味があり、2人がいない空間でも何かを感じ取るようになりました。

私は、ある意味実感のない浮遊したこの時代の中で、日々、変わるものと変わらないもの、この二つを感じながら絵と対話しているのかもしれません。



ながい夢
キャンバス、油彩
162.0 × 130.3 cm
2007 ～ 2008 年
photo by　石原さやか



「日々」
キャンバス、油彩
130.3 × 130.3 cm
2007 ～ 2008 年
photo by　石原さやか



一色映理子

1981 年　愛媛県生まれ
2004 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2006 年　武蔵野美術大学大学院美術専攻油絵コース修了

個展
2005 年　フタバ画廊／東京
2006 年　フタバ画廊／東京
2008 年　フタバ画廊／東京
2009 年　フタバ画廊／東京

グループ展他
2005 年　世界堂絵画大賞展　　世界堂本店／東京
2007 年　前田寛治大賞展　　日本橋髙島屋／東京、倉吉博物館／鳥取

今井俊介

IMAI SHUNSUKE

制作にあたって

描くモチーフはポルノグラフィと花のたった2つである。これらのモチーフを抽象的な形に分解し、すべてのものを等価に扱い複雑で装飾的な画面として再構成する。その模様を読み解こうと視線を動かすうちに、見るという視線の運動を見ているという経験を促す装置としての絵画を作っている。

使用されるポルノグラフィはすべてインターネットから抽出しており、そこに映し出される人物たちの大半は人格を求められず、ただそこに映っている肢体の表面こそが求められている。

そこにあるのは一方的な視線であり、見る者と対象との距離が露になる。

その距離を非感情的なまなざしでもって描き出そうとしているのであり、装飾的な絵画を描こうとしているのではない。

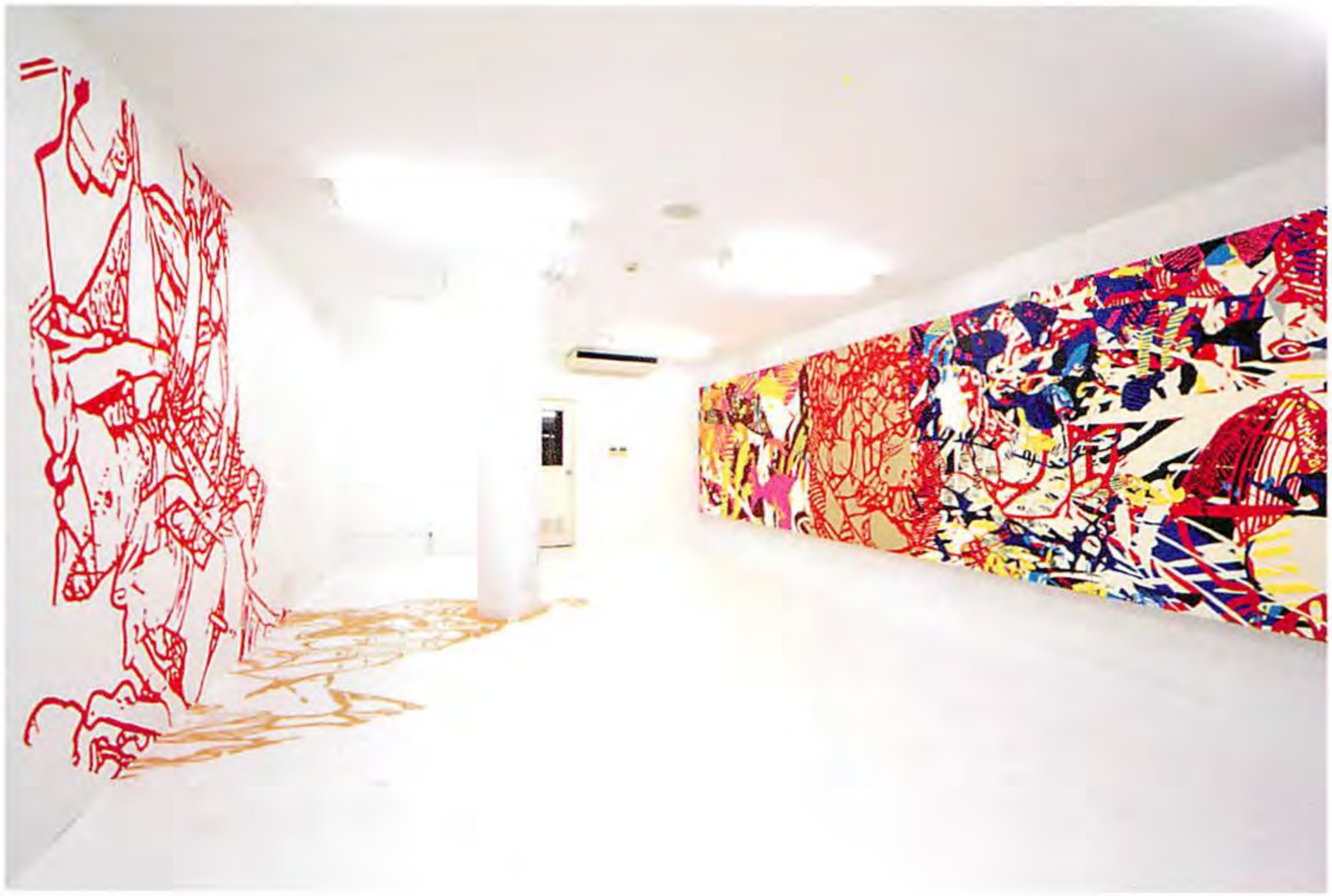
ポルノグラフィをモチーフとして選択するうえで重要であったのは、それらが存在するインターネットという世界はあらゆるものを等価にしてしまい、平面上で複雑に絡み合う場であるということだ。私の描こうとする絵に近い非常に装飾的な—各々が持つ差異がフラットな状態に解体され等価なものとして扱われる—世界である。

そこには意味も物語も何もない。

ただそこにあり、我々はただそこにいるだけだ。



patterns
キャンバス、アクリル
92.0 × 120.0 ㎝
2009 年



展示風景
2008 年
photo by　田中雄一郎



今井俊介

1978 年　福井県生まれ
2002 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2004 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展
2002 年　flower & honeybee　exhibit LIVE [laiv] ／東京
2003 年　Peeping Tom　exhibit LIVE [laiv] ／東京
2005 年　empty babes　APARTMENTS POOL ／東京
2006 年　patterns　GFAL　武蔵野美術大学／東京
2007 年　empty eyes　ZENSHI ／東京
2008 年　emptiness　遊戯室（中崎透 + 遠藤水城）／茨城

グループ展
2002 年　whap summer selection　warehouse art project　武蔵野美術大学／東京
2003 年　group show　warehouse art project　武蔵野美術大学／東京
2004 年　CET04　INO ビル／東京
2007 年　something as if we do　cafe parlwr ／愛知、名古屋大学プロジェクトギャラリー「clas」／愛知
SAKURA meets ARTS　HK+MODE SHIROKANE ／東京
2008 年　Red　ZAIM ／神奈川
NEW TOKYO CONTEMPORARIES　新丸の内ビルディング 7 階丸の内ハウス／東京

沖　晋吾

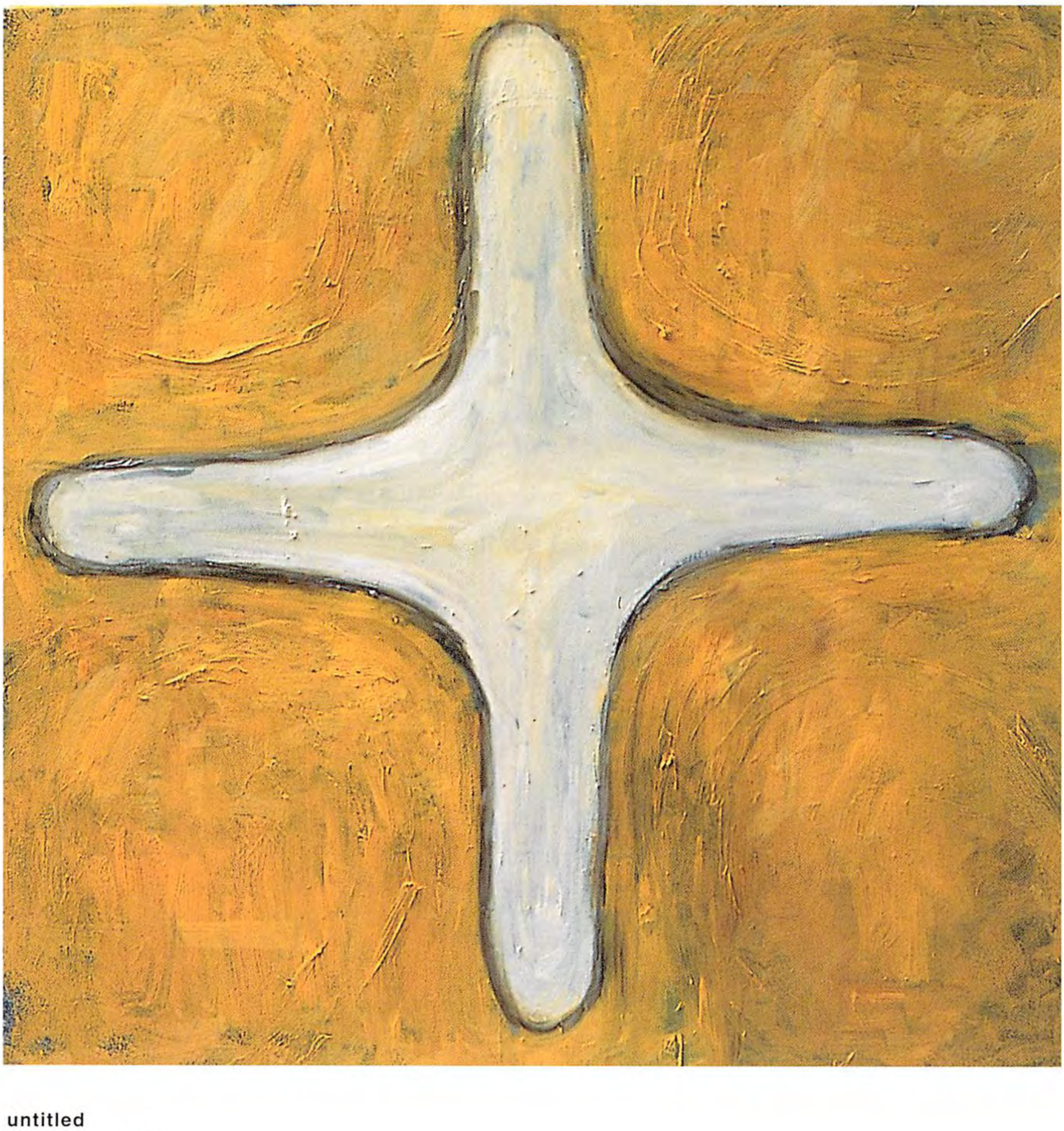
OKI SHINGO

制作について

学生の頃、何を描きたいのかわからなくなり、半ばやけになって描いた一枚の絵がありました。それまで描いていた画面の上に一気呵成に油絵具を塗りたくり、ぐりぐりとオイルバーを押し付けてできたような形がありました。画面には、茶色いギラギラのソーセージが何本か連なったような形がありました。ぐりぐりとオイルバーを押し付けてできた『何だこれは?』と、それまで描いたことのない抽象的な形態に戸惑いながらも、その面に私は魅力と親しみを感じました。そしてしばらく眺めているうちに『ああ、なるほど』と納得したのです。

現在の制作もその延長線上にあります。ただ最近の制作では、意識的に顔のイメージや山のかたちを用いることがあります。それらを用いたきっかけは、何ということはなく、トンネルを掘る作業中に、ふと後ろを振り返ると、そこに顔のイメージが現れたというような具合で、これまでの作品よりも少し風通しをよくしたかったのです。

トンネル掘りの作業は、これからも続きます。どこへつながるのかはわかりませんが、楽しみながら掘り進めていきたいと思っています。



untitled
キャンバス、油彩
116.7 × 116.7 cm
2009 年



untitled
キャンバス、油彩
162.0 × 194.0 ㎝
2008 年



沖　晋吾

1981 年　大阪府生まれ
2003 年　大阪教育大学教育学部教養学科芸術専攻美術コース卒業
2005 年　大阪教育大学大学院教育学研究科芸術文化専攻修了

個展
2004 年　CUBIC GALLERY ／大阪
2007 年　gallery wks. ／大阪
2008 年　gallery DEN ／大阪
2009 年　gallery DEN 58 ／大阪

グループ展他
2003 年　第 12 回吉原治良賞美術コンクール展　　大阪府立現代美術センター／大阪
　　2003 京展　　京都市美術館／京都
2007 年　大阪教育大学からの発信 知覚の稜線 II　　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪

加山　隆

KAYAMA　TAKASHI

描き続けるとは？

絵を描き続けると決めてから、かれこれ20年以上経ってしまった。本当にこれでよかったのかと、自分のファイルを眺めていると、恐ろしいことに気付いてしまった。

新しい物、自分とは何か?と探し続けていたはずが、五つほどのパターンを繰り返しているだけだった。『新しい』ということはどういうことだろう。なにものにも影響されず、本当に新しい物とは?そんなことがあり得るのだろうか?過去の遠い記憶を探りアレンジしているだけではないか?そんなことで友人たちに追いつけるのかな?などと思い悩み落ち込んだ。

そんなとき一人の作家と知り合った。その作家の「続けることはそれだけでもすごいことだ。」という言葉に、『続けるとは?』と新たな疑問がわいてきた。まずは、昨日と全く変わらなくてもいいからと、とにかく描き続けることに専念した。一年ほど続けた結果、今までとは全く違う作品ができた。新たな考えが浮かんだ。

人の行為には何かしら意味があるのだろう。そしてその行為が人を作り、生まれてくる自分独自の物があるのだろう。それは自己発生的であり何よりも新しく、自分らしい物なんだと気付いた。

その作家の「今できることを精一杯やればいいんだ、自分を信じて一つ一つ遣り抜いていけば、きっといつか良い作品ができるんだ。また続けていくことはそれだけですごい。」という言葉をあらためて信じることができた。

また、その行為は毎日やり続けることにより、祈りのような儀式にも思えてくる。どんなに苦しくても安らげる聖域にいつのまにかなっていた。ふらふらになっていても、ここへ戻ってこれた、という喜びを感じることができるようになってきた。

２００２年くらいからは作品の表面を平らにすることを始めた。なぜか今まで、平面にこだわり続けてきたのだが、凹凸していることが私にはすごく邪魔に思え、サンドペーパーで削った。ただ何となく始めたことだった。ところがある日、私の作業が、時間というものを塗り込める作業になってきていることに気が付いた。毎日同じような作業の繰り返しの中から少しずつ変わってくる自分の物があるのだろう。それは何度も繰り返し塗ってい

る色も、日数とともに深みを増していく。塗り重ねては削るということで、ついさっき描いた物と、ずいぶん前に描いた物とが融合し目に飛び込んでくる。そういった時間のずれ、心の揺れなどの不安を画面に表すことが今の私の課題になっている。

その不安に身をゆだね、その中で、漂いながらも包み込まれ、ほっとする空間を画面に表したい。不安というネガティブなものを、自分の生きる活力にしてしまうことも出来るだろう。そして、その中でやっと心の平安が訪れると思っている。

２００６年からパネルの角を取り去ることにした。平らにすることの延長で画面の隅々まで気持ちをつなげ、まわりまで意識するために始めたことだった。しかし、角がなくなることで、思いもよらぬ存在感が出てきて、完成度も格段に上がったような感じがする。今ではとても気に入っている。

「2008.3.22」
パネル、アクリル
162.0 × 130.0 ㎝
2008 年
photo by　唐木孝治



展示風景（トキ・アートスペース）
2008年



加山　隆

1963年　長野県生まれ
1989年　愛知県立芸術大学美術学部油絵科卒業
1992年　カッセル大学（GHK）自由芸術科［ドイツ］
1990～1993年　ドイツ滞在

個展
1989年　飯田市美術博物館市民ギャラリー／長野
1991年　カフェ・アム・ベーベルプラッツ／カッセル［ドイツ］
1992年　ギャラリー　ルーブル／ローテンブルグ［ドイツ］
1993年　ギャラリー　ストゥディオ　カウシュ／カッセル
1994年　飯田市美術博物館市民ギャラリー／長野
1996年　飯田市美術博物館市民ギャラリー／長野
1997年　アートフォーラム谷中／東京
　　アートフォーラム弘前／青森
1998年　アートフォーラム谷中／東京
2000年　ギャラリー山口／東京
2001年　ギャラリイK／東京
2003年　トキ・アートスペース／東京
2004年　トキ・アートスペース／東京
2005年　トキ・アートスペース／東京
2006年　トキ・アートスペース／東京
2007年　トキ・アートスペース／東京
2008年　トキ・アートスペース／東京

グループ展他
1987年　日笠保十加山隆　　ギャラリーラブコレクション／愛知
1991年　Annette Danhus＋Takashi Kayama　　Galerie M／カッセル
1996年　坂口香二十加山隆　　ギャラリーラブコレクション／愛知
1999年　国際インパクトアートフェスティバル'99　　京都市美術館／京都
2000年　2000・日本・25　　ギャラリイK／東京
　　20世紀最後の小品展　　アートフォーラム谷中／東京
　　『加山隆十小林昌明』二人展　　キング堂ギャラリー／長野
2002年　現代の創造展　　飯田市美術博物館／長野（'03、'04、'06、'07）
2006年　三遠南信アート展　　飯田創造館／長野、桜ヶ丘ミュージアム／愛知、ギャラリーロゼ／静岡
2008年　ORTICAL NATURE　　トキ・アートスペース／東京

桑久保徹

KUWAKUBO TORU

ナオへの手紙

第八六信

月曜の朝に郵便為替で五万を受け取った、ありがとう。ここの電気やプロパン代の支払いに窮していたので、助かる。いまのところここの生活費は予想していたほど安くはない。でも、大作を二点仕上げることが出来た。それは、おそらく今頃のハッシモでは出来なかったことだ。

今は素晴らしい天気だ。先ほど大家に支払いを済ませたそのついでに海まで行ってみたところだ。浜辺には一組の恋人たちがいて、一心に砂山を作って遊んでいた。なかなか大きな工事で、高さが五十センチほど。山のまわりには海水を引き込んだ堀があり、山の脇には十字のトンネル、峰づたいには丁寧に道までである凝ったつくりであった。その様子がおもしろくて、海を眺める振りをしながらその作業が終わるまで見ていた。ペンと紙を忘れたのが残念だった。

ここの海は鯖のような色で絶えず変わりやすく、セルリアンかコバルトであると思ったら、突然、紫色や薄緑色になる。常に青かどうかも定めがたい。瞬きをする間に真鍮色にかわり、そしてバラ色、灰色の反射に変わっている。私が手に入れたこの複雑な海の様子を、私の仕事によって君に見せられればと砂の上で考えていた。

以前君は手紙の中で、描き進めていた百五十号の作品を楽しみだと言ってくれたね。私は常に君に勇気付けられ、この途方も無い可能性の闇を進み続けることが出来る。しかし、私は一つの可能性しか選ぶことが出来ないのが悔しくてならない。描くほどに、描けなかった可能性について考える。一筆置く度に、果たしてそれが唯一の正しさであったのかどうかについて考える。私は本当に臆病者だ。あの敬愛すべきラミレスやヴェルフリのように仕事が出来れば。完璧に完成された世界の王様だけに許される特権、限られた世界の整合性、私はまだそれを手に入れることが出来ていないでいる。だからこんなにも途方に暮れてしまうのだろう？

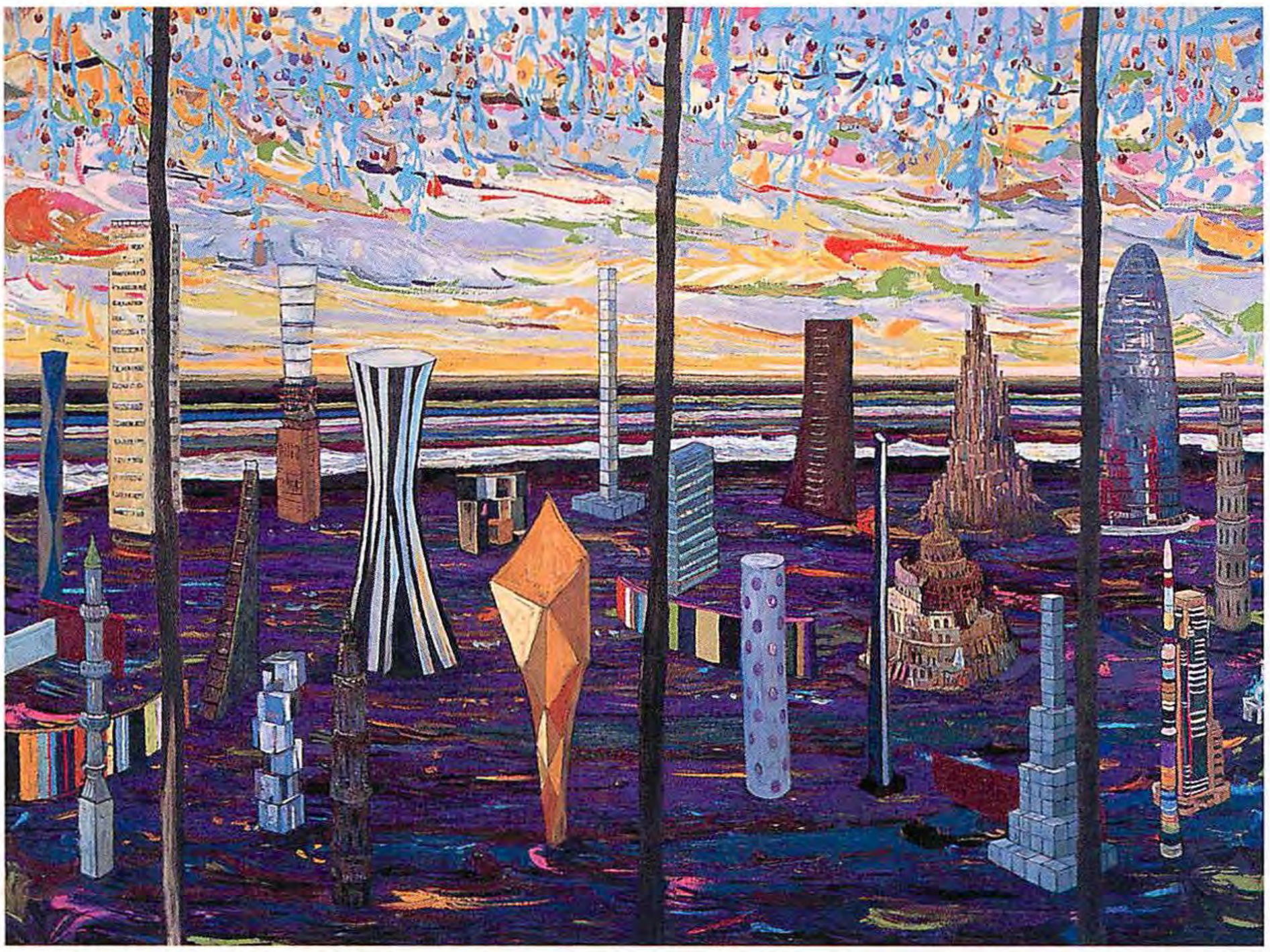
暗い色については本当に苦労してしまった。白を混ぜると色が濁っていってしまうので、使うことが出来なかった。さらに、暗い色は薄い付きの方が美しいかもしれない。

おかげで、この時期にも関わらず、乾燥が
とても速くて参ってしまった。モディやユ
イチは小さいうえにオイルをたくさん使っ
て描いたから、あんなにも暗い色が輝くの
だとわかった。私は違った方法で暗い色の
美しさを見出さなければならない。いまの
ところ、私自身は気に入っているのだが、
君や、君の友人たちにとってはどうか。対
になるもう一点の百五十号については明日
から取り掛かろうと思っている。
すまないが少々の絵の具を送って欲しい。

パーマネントグリーンディープ　九号　六本
カドミウムイエロー　二十号　三本
パーマネントヴァイオレット　九号　六本
ピンク　二十号　三本
イエローオーカー　二十号　三本
ターペンタイン　五百ミリリットル瓶　二個
パレット　大
平筆（豚毛）　九号／六号　各二本

ピンクは乾燥の遅いコリアのものを頼む。
あとはホルベイン。平筆は一番安いもので
構わない。おそらくカイードで一本五百か
ら六百のはずだ。
もうすぐドーレンでフェアが始まるだろ
う？君もその準備に追われているに違いな
い。きっと成功する、君の扱う作品たちは
ドーレンの人たちに新鮮な驚きを与えるは
ずだ。次の手紙で、詳細に教えてくれ。
君と君の愛する画家に握手。

バベルと果実
キャンバス、油彩
194.0 × 259.0 ㎝
2008 年
photo by　Ikuhiro Watanabe





男たちと白い箱
キャンバス、油彩
181.8×227.3㎝
2008年
photo by　Ikuhiro Watanabe



桑久保　徹

1978年　神奈川県生まれ
2002年　多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業

個展
2002年　ペッパーズロフトギャラリー／東京
2003年　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
2005年　小山登美夫ギャラリー Project Room／東京
TKGY at lammfromm／東京
トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
2006年　Galerie Davide Gallo／ベルリン［ドイツ］
Gallery Stump Kamakura／神奈川
2007年　do Art Gallery／ソウル［韓国］
bendixen contemporary art／コペンハーゲン［デンマーク］
2008年　小山登美夫ギャラリー／東京

グループ展他
2003年　トーキョーワンダーウォール作品展　東京都現代美術館／東京
プロムナードギャラリー　新宿駅プロムナード／東京
2004年　横浜市民ギャラリー／神奈川
トーキョーワンダーウォールの作家たち展　東京都現代美術館／東京
2007年　ポートレートセッション　広島市現代美術館／広島
Summer Show　小山登美夫ギャラリー／東京
Speculum Mundi　Gallerie Davide Gallo／ベルリン

佐藤純也

SATO JUNYA

あかるい話

素材、モチベーション等／
　まずは慣れない島を知るためにも散歩してみる。道すがら手持ちぶさたから落ちていた木の枝を拾う。ひとしきり歩いてみたが何もすることもない。
　気まぐれに浜辺でも行ってみる。浜に着き木の枝を使って波打ち際で絵でも描く。飽きることもなく、浜にいることや無人島にいることも忘れて。

絵のアリバイ／
　雄弁に、抜け目のない話で作品を説明できたとしても、人は作品を見ている。目を信じさせることには、それとは違うことが必要だ。

背中を見る／
　本を広げる。目をつむり、指した地図の上は大きな海の真ん中の、さらに中。海と大雨。暗雲が滲む墨の形で広がる。重い蓋となった雲は慎重にゆっくりと少しずつ海へと被さる。雨は、音を音で消すほどの勢いで水面を煮えたぎる湯の姿へと変える。通り過ぎる鳥や水をかき分け進む魚の姿も、人を乗せるものもない。ありとあらゆる眼、見るものが無い場所と降る雨。
　そんな景色を背中のあたりに思い浮かべる。

昨日／
　先人のつくり出した傑作の数々を思い返してみる。昨日を遠くへ少しずつ引き伸ばして考える。自分が生きて来たこれまでの昨日を超えて、さらに考えてみる。
　今、描いた絵は昨日へと必ず運ばれる。傑作の数々を作った人たちとわたしを隔てるのはレールをまっすぐとすべり走る進歩の差ではなく、昨日の数の違いでしかない。つまり過去より今が優れていると安心できることはない。

カラー／
　次の日の朝。できることなら昼、さらに欲を言えば夜中に降ってきたアイディアがせめてずっと色褪せないでほしい。

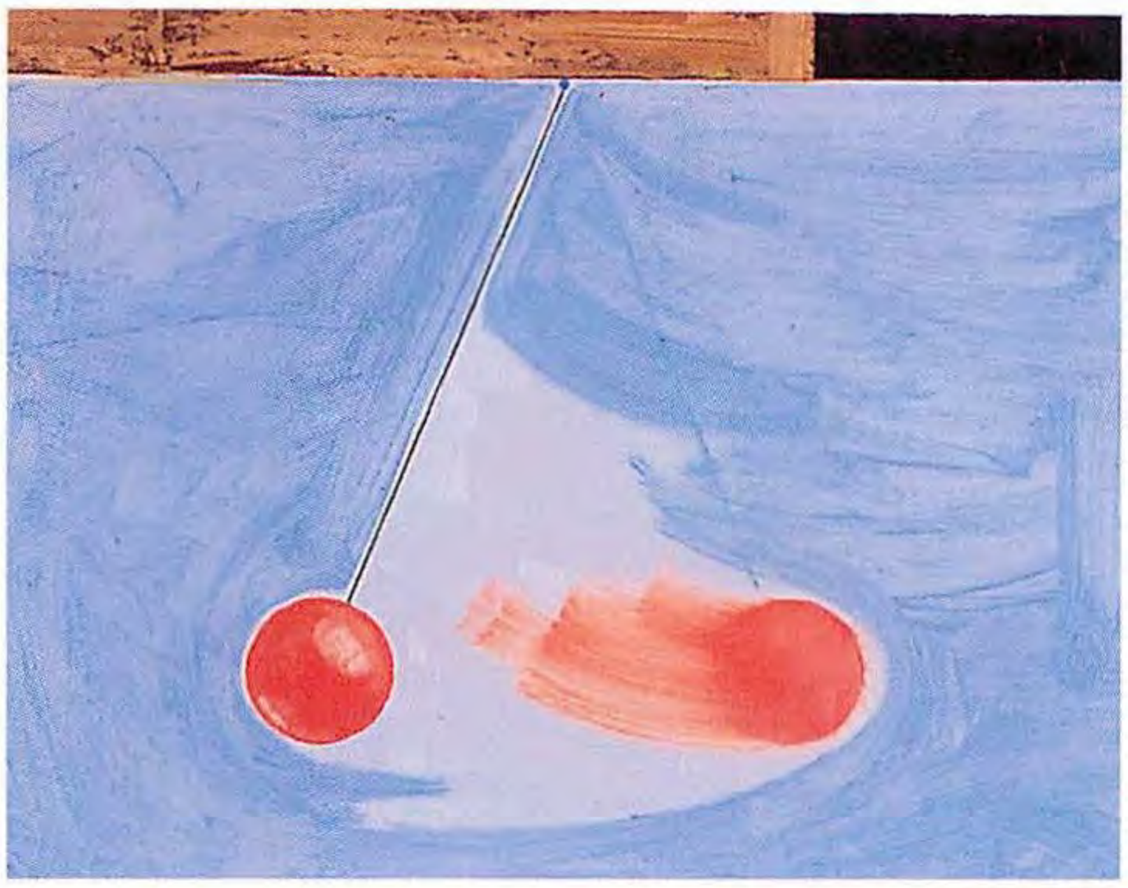
どこかで、誰かが／
『こんなものがあったらいいな』は気が

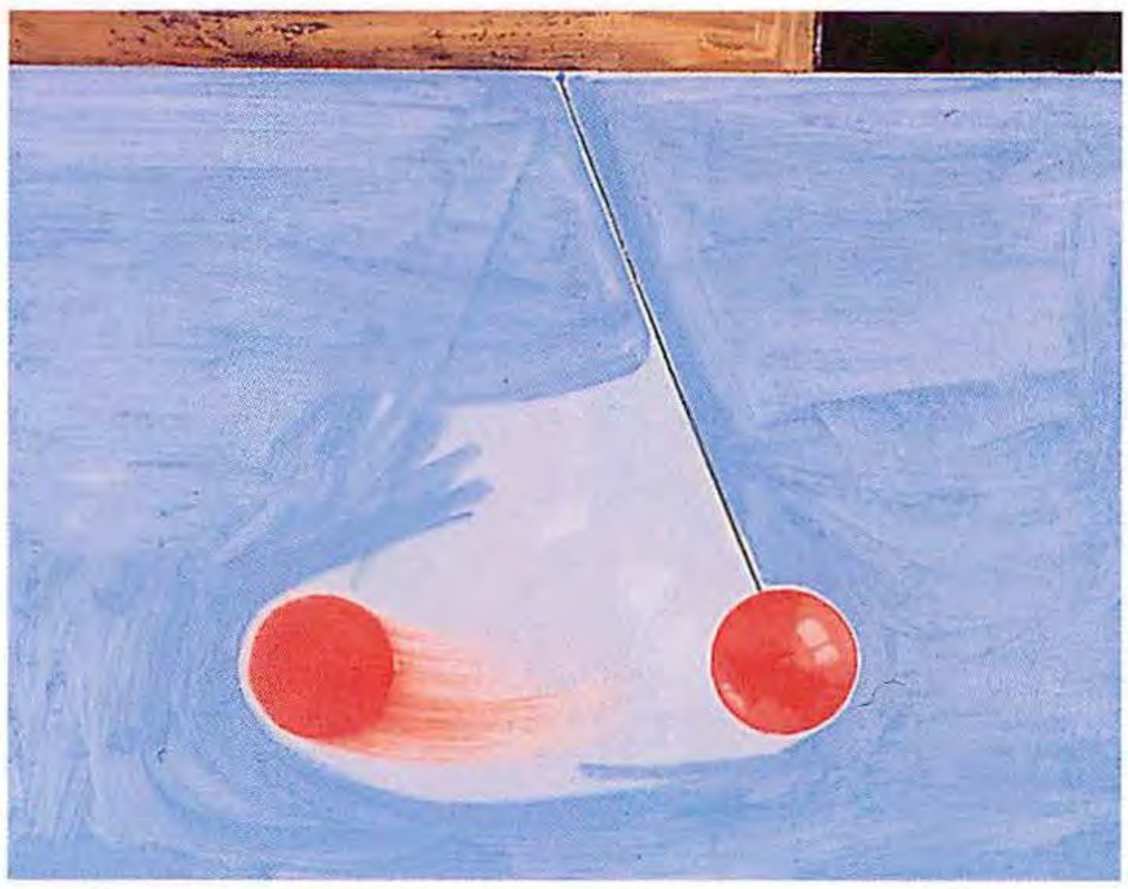
つけば店先で売っているし、パソコンの機能の進歩には、使っている側が追いつかないくらいだ。ラジオをつければ気持ちを捉える音楽が流れてきたりもする。観たい映画や、読みたい本だって気付けばそこにある。ファッションや流行はいつも発信されている。諦め調子の芸術家はまるで子供のようだ。

どこかで誰かが考え、ものをつくっている。

あかるい絵／

まず、すべてを明るみの下に置いてみる。隠されていることは何もない。謎はそれから。





振り子（2枚組み）
キャンバス、油彩
各32.0×41.0㎝
2008年
photo by　丸橋伴晃

ふた
キャンバス、油彩
30.0 × 24.0 cm
2008 年
photo by 丸橋伴晃





佐藤純也

1977 年　宮城県生まれ
2000 年　多摩美術大学絵画科油画専攻卒業

個展

2000 年　トキ・アートスペース／東京
　　murata & friends ／ Berlin［Germany］
2002 年　murata & friends ／ Berlin
2005 年　あかるい絵　　青山｜目黒／東京
　　murata & friends ／ Berlin
2006 年　Reflection　　murata & friends ／ Berlin
　　Picturegenic　　青山｜目黒／東京、BOICE PLANNING ／神奈川

グループ展他

1998 年　主体の開放　　世田谷美術館区民ギャラリー／東京
1999 年　閉塞からの脱出　　神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
　　昭和シェル現代美術賞展　　目黒区美術館区民ギャラリー／東京（'00）
　　アーティストの周縁　　トキ・アートスペース／東京
2001 年　NICAF　　東京国際フォーラム／東京
　　NCAF　　名古屋市民ギャラリー／愛知
2002 年　MOT アニュアル Fiction ?―絵画が開く世界　　東京都現代美術館／東京
　　Pro Tsubo　　Theodor-Zink-Museum ／ Kaiserslautern［Germany］
　　ハレの日　　BOICE PLANNING ／神奈川
2003 年　（40 mal）40 × 40 Kleines Format im quadratischen Rahmen　　Kunstverein Rugen ― Galerie Circus1 ／ Rugen［Germany］
2004 年　Body　　Galerie Robert Drees ／ Hannover［Germany］
　　Isst du gerade meinen Tofu?　　Backfabrik temporary exhibit.space ／ Berlin［Germany］
　　Pro Tsubo　　Neue Galerie Landshut ／ Landshut［Germany］
　　Portraits　　ESSO Gallery ／ New York［U.S.A.］
2005 年　あたらしい果実　　東京都現代美術館ハイビジョンルーム／東京
　　Malerei,Objekte　　Galerie 14-1 ／ Stuttgart［Germany］
　　MADE IN JAPAN　　Sebastian Fath Contemporary ／ Mannheim［Germany］
　　Giappone oggi　　Galeria CadOro ／ Roma［Italy］
2006 年　百花撩乱　　BOICE PLANNING ／神奈川
　　Minimal Illusions,Arbeiten mit der Sammiung Rik Reinking　　Villa Markel/Bahnwarterhaus ／ Esslingen am Neckar［Germany］
2007 年　机上位　　BOICE PLANNING ／神奈川
2008 年　NEW TOKYO CONTEMPORARIES　　新丸の内ビルディング 7 階丸の内ハウス／東京
　　コバルトブルーを追いかけて　　ZENSHI ／東京
　　ART IN TIME AND STYLE MIDTOWN vol.5『BROKEN』　　TIME & STYLE MIDTOWN ／東京
2009 年　座布団レース　～偶然の出会いから、急に広がるイメージ～　　トーキョーワンダーサイト本郷／東京

佐藤修康

SATO NOBUYASU

影と変化

私にとって一番大切なことは常に『絵を描いている瞬間のリアルさ』と『変わる』ということだ。

『絵を描いている瞬間のリアルさ』とは絵の具でキャンバスに描いた瞬間はもちろんのこと、絵を描いている過程も含まれている。例えば作品を創作している時に自然と秩序やルールといったものが形成されるが、そのこだわっていたことやここはこうあるべきだということが、ふと一変して全く関係なく描ける時がある。その時は何処をどうやっても良い作品が創れると思えるし、心の底が震えるような自由さをも感じられる。しかしそう感じるのも瞬く間に終わり、もう一度苦悩と葛藤の中で新しい秩序とルールが生まれる。これは1つのケースにすぎないが、そういった一連の流れが私にとって、手で掴み匂いを嗅ぎ咀嚼できるほどのリアルなのだ。

結局作品を創っている時、絵の具をキャンバスに付けた瞬間が最高にリアルの瞬間であって作品が完成してしまえばそれはもう無くなり、あとは只の残骸もしくは自分の影になってしまう。いつまでたっても自分の影を創り続けているのだ。

だからと言ってそれをやめようとは思わない。それは所詮影だけれども、そこには自分が感じたリアルさが僅かだが確かにそこに感じられるし、実際に私は絵を描いているときにはっきりと体感しているからだ。だからより深いリアルをいつまでも求めるし、それを作品に留めようとしている。

もう1つ大事なことが、『変わる』ということだ。

制作は最初におおまかなイメージを考えてから絵を描いてるが途中でまず間違いなく見れば混乱してしまうような作品になってしまう。すると最初のイメージとはかけ離れたものになってしまい、他者からされるのだろうけど、頭で解っていながらどうしてもこわしてしまうのだ。

なぜそんなことをしてしまうのか自分でもよくわからなかったが、たぶんもっと先に進みたいがためにしているのだと気づい

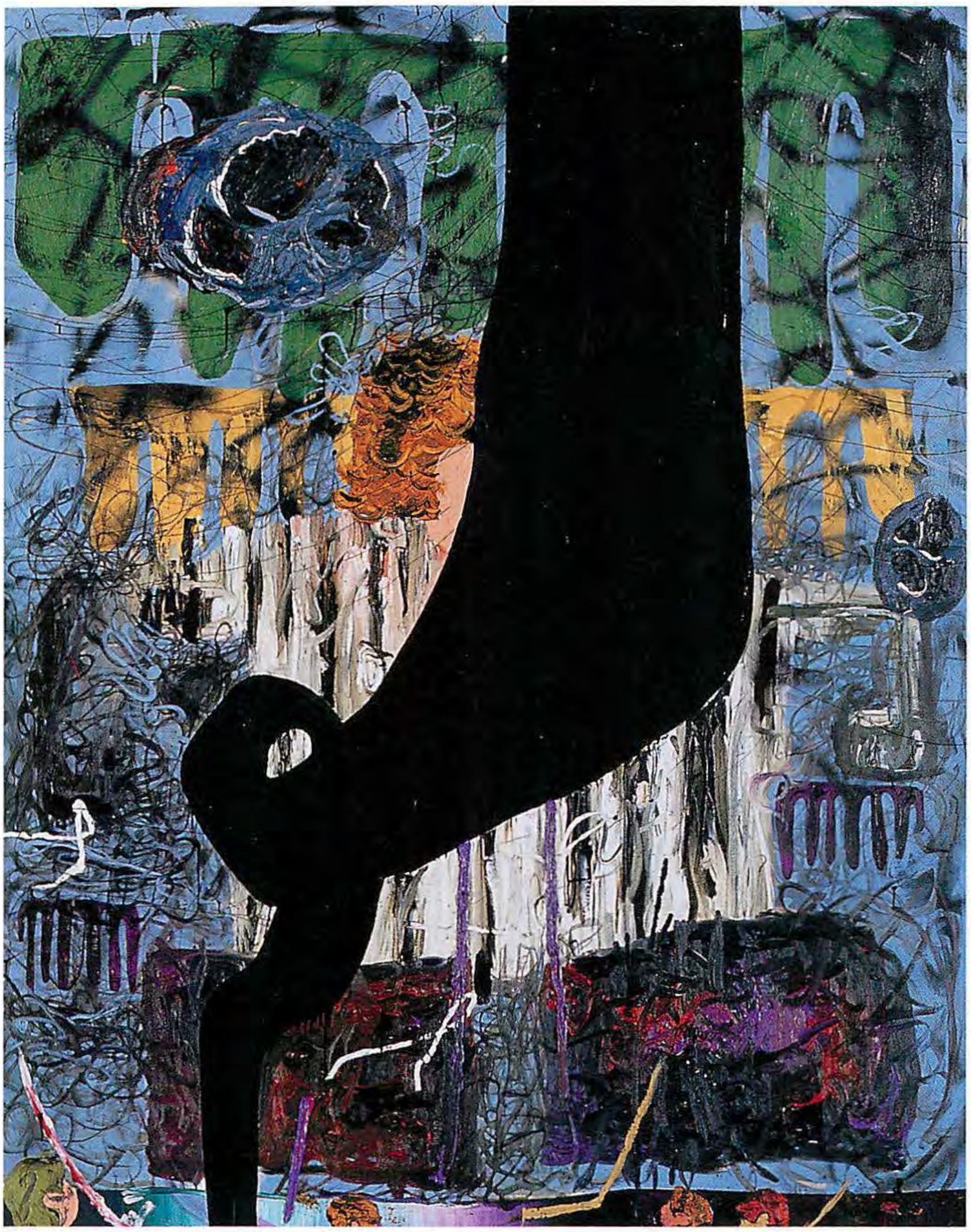
た。完成を求めている訳じゃなく、もっと
もっと変わりたいのだと。
変わることというのは私にとって唯一の普
遍的な価値かもしれない。
変化というのは結果良くなったり、悪くな
ることが重要なのではなく変わり続けるこ
とが重要なのだと私は考えている。変わり
続けることでのみ前に進むことができ、さ
らに変わることによってリアルさの深みが
増すのだ。

私の作品にはテーマはないが、ある一貫し
た気持ちのようなものがある。それは自由
であったり、ある種の怠惰・復讐といった
ものだ。それは創作をやめたとしても私の
中にある生き方のテーマかもしれない。



Wake up! Revenger
キャンバス、油彩
227.0 × 181.0 cm
2008 年

Rhizome
キャンバス、油彩
227.0 × 181.0 ㎝
2008 年





佐藤修康

1982 年　岡山県生まれ
2006 年　東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業
2008 年　東京造形大学大学院造形研究科美術研究領域修了

グループ展他
2006 年　port　すろうがギャラリー／岡山
2007 年　warlord　東京造形大学ギャラリー／東京
『甑島で、つくる。』Koshiki Art Project　上甑島／鹿児島
2008 年　POST　ZAIM ／神奈川
exit exhibition #01　art project room ARTZONE ／京都
101 Tokyo Contemporary Art Fair 2008　旧練成中学校／東京
AFTER THE REALITY 2　Deitch Projects ／ニューヨーク［U.S.A.］
二人展　hiromiyoshii ／東京
NEXT DOOR vol.6　T&G ARTS ／東京
Todd　FARM the salon for art,Tokyo ／東京
2009 年　VOCA 展 2009　上野の森美術館／東京

杉田陽平

SUGITA YOHEI

プラトニック・ペインティング

僕は父親が四日市ぜんそくであるがゆえなのか、幼少期から『アトピー性皮膚炎』の症状で自らの皮膚を剥がす癖があったのですが、それは、今現在、皮肉なことにその醜くかった表層の少年時の自分をカンバスに表現することが〝美術の探求〟になろうとしています。

何故、『絵の具の皮で絵画を制作する行為』に至ったのかと聞かれることがありま す。

人間世界では、外見も中身も破綻がない美女・美男が美徳とされるワケで、鏡の中にいる自分はなんて醜いのだと、子供ながらに孤立し絶望があり、その体験が死ぬほど嫌でしたが、オトナになるにつれてソノ病とは一見上手く付き合えるようにはなっていったのです。

しかしながら、絵画を毎日研究する立場に偶然なった時、毎日、毎日、目の前にあるのはカンバスという真実を移す〝鏡〟でした。

僕はその〝鏡〟を凝視し、向き合うことにしました。

そして『ああ、ここには本当は醜いが、特別に輝く自分がいるではないか。正直に描こう』と真摯に思えてしまったのです。

そうして出来上がった作品を観ると、なんとまぁ、狂った、醜く、見たこともない絵画が出来てしまった。それでいて素晴らしく、〝自分らしさ〟が感じられた。

以上のように自身が生まれて実際に体験した環境をテーマの根源として、個人の主観だけに止まらず世界中の社会環境にリンクさせて絵画制作ができたことはこの絵画シリーズの表現の成果だと思っています。



炎上し儚き想い出を照らす涙の船
キャンバス、アクリル
145.5 ㎝× 145.5 × 4.0 ㎝
2008 年



早く、アタシを見つけて！
キャンバス、アクリル
99.0 cm × 99.0 × 4.0 cm
2008 年



杉田陽平

1983 年　三重県生まれ
2008 年　武蔵野美術大学油絵学科卒業

個展
2005 年　HAPPY PAINTING 展　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
2008 年　杉田陽平展　東京都庁／東京
プラトニック・ペインティング　GALLERY MoMo Ryogoku ／東京

グループ展他
2004 年　シェル美術賞展　代官山ヒルサイドフォーラム／東京（'07）
トーキョーワンダーウォール作品展　東京都現代美術館（'07、'08）
2006 年　トーキョーワンダーシード　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京（'06 ～ '09）
2007 年　STRENGER PROJECT Part 1『杉田陽平＆卯野夏子』　Gellery strenger ／東京
2008 年　ART AWARD TOKYO 2008　行幸地下ギャラリー／東京
シンジュクアートインフィニティ　旧マルイシティ新宿工事仮囲い壁面／東京
New laid eggs　GALLERY MoMo Roppongi ／東京

田中洋喜

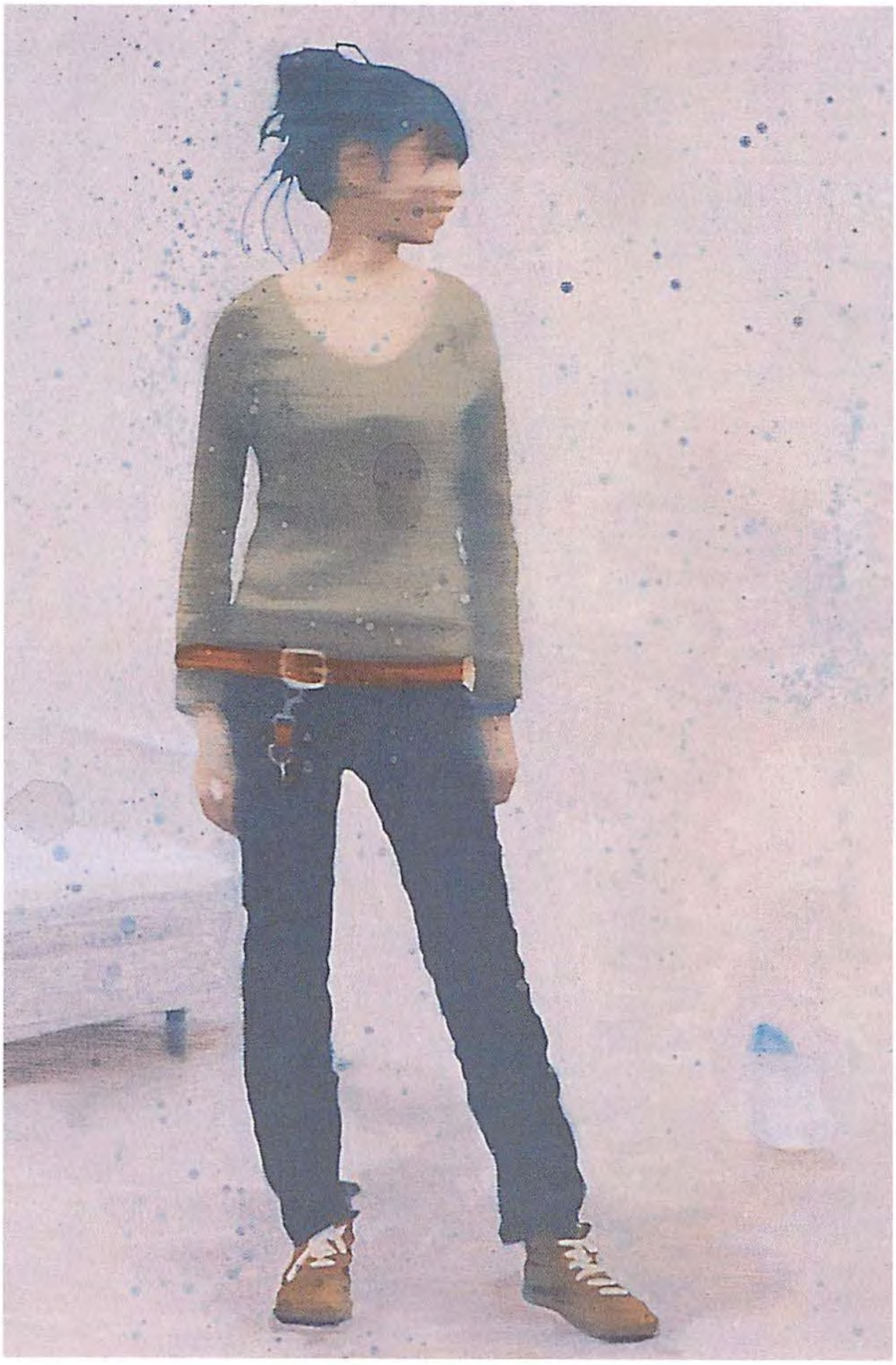
TANAKA HIROKI

距離なき渦流からの逸脱

幼少の頃は身の回りに未舗装道路が多く残っていて、友人達と泥だらけになって走り回っていました。小川に入り、草むらの雑草で切り傷を作り、木陰のコンクリートの上でいつまでも座り込んでいました。今では記憶が薄れてきていますが、その頃、世界はどこまでも広く、いつまでも目の前の景色が続くものだと思っていました。

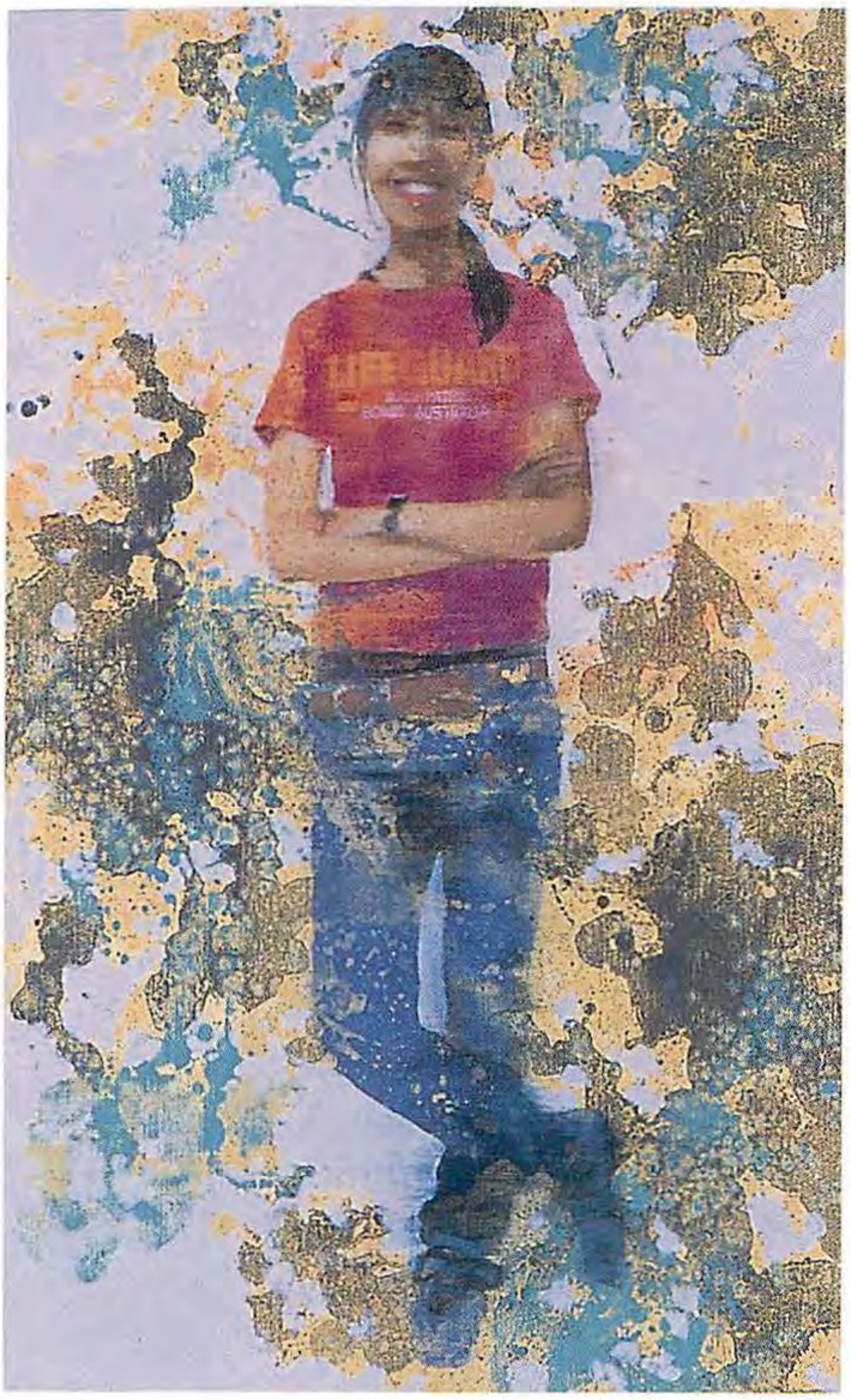
以前と変わらない何気ない毎日ですが、あらゆるメディアによって一見世界は近づいたように感じます。メディアの進歩を直に感じて成長した我々には、この距離感が変化した世界にもリアリティを感じることが可能です。そこでは個の形は消失し、それぞれが混和した状態で存在します。新しい距離感は世界が近づいたように感じさせますが、逆に物理的距離が意味をなさない世界を享受することは、更に広大な世界へと我々を導くことになったのではないでしょうか。

目の前の景色は既に変化してしまいましたが、我々にとって世界は相変わらず広大で、ときに孤独感すらも沸き上がってきます。ただ、この孤独感は決してネガティブな意味だけを内包している訳ではなく、無数の情報体が充溢する毎日の中で、個人の在るべき姿や在るべき場所を教示してくれるものだと考えます。夜中、コンビニにビールを買いに行く途中。バイクに乗って、フラリと旅に出たときの道端での休憩。キャンバスの前で筆をつかんだまま目を閉じた瞬間。そんな、なんでもない瞬間に広い世界からの脱出口が現れます。その瞬間はあまりにも唐突で、世界から分離した自の形を感じ取る前に、いつもの当たり前の時間が流れ出して、あの不思議な孤独感は指の間をすり抜け、決してこの手に掴み取ることは出来ません。それでも、幼少のときに感じた自分の居場所をもう一度確認したくて、度々足を止め、自身から拡充する世界から意識を引き戻します。



hugeness
キャンバス、油彩
80.3 × 53.0 ㎝
2009 年
photo by 木田光重

drip
キャンバス、油彩
53.0 × 33.3 cm
2008 年





田中洋喜

1979 年　兵庫県生まれ
2002 年　京都精華大学美術学部造形学科卒業

個展
2002 年　CUBIC GALLERY ／大阪（4 月）
　　CUBIC GALLERY ／大阪（8 月）
　　SPASE ALTERNATIVE ／京都
2003 年　CUBIC GALLERY ／大阪
2004 年　CUBIC GALLERY ／大阪
2005 年　CUBIC GALLERY ／大阪
2006 年　CUBIC GALLERY ／大阪
2007 年　CUBIC GALLERY ／大阪
2008 年　CUBIC GALLERY ／大阪

グループ展他
2002 年　名古屋街ん中芸術祭　　ラボ遊園地、旧豊田邸／愛知
2003 年　第 10 回　画廊の視点　　大阪府立現代美術センター／大阪
2006 年　シェル美術賞展 2006　　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
　　アミューズ・アート・ジャム　　京都文化博物館／京都
2007 年　Paintings 2007　　CUBIC GALLERY ／大阪
　　contact 展 - テンカイする時間 -　　shin-bi ／京都
　　船場 de ART 元気の会 オークション展　　CAS ／大阪
　　Pre-JAM2007　　art project room ARTZONE ／京都
2008 年　Group Interart「際」　　ギャラリー　アコスタージュ／香川
　　アジア芸術祭　　昌原大学内ギャラリー／昌原市［韓国］

谷口ナツコ

TANIGUCHI NATSUKO

ここにあるもの

その辺を、ぶらぶらしながら近くに目を遊ばせてみます。

街中のどぎつい人工の色よりも、乾いた夏のまひるに見る花々の色の方が、やりすぎでずっと下品な色をしています。

目にしみるような電気の光よりも、晴天真冬に見るちいさな雪山の方が、強烈で目が壊れそうにビカビカしています。

私が、やりすぎな色ばかり塗ってしまうのも、ビカビカに光るラメ入り絵の具が大好きなのも、きっと身近なこんな事が関係してるからなのだ、と思います。

その辺を、ぶらぶらしながら今度は、少し遠くの方へ目を飛ばしてみます。

きれいな空や夜月や星々は、きれいすぎるとまるで偽物のように見えたりします。

得体の知れない人間よりも、静かで小さな森の方が、それを背後にするのはちょっと怖いです。なんの神さまも信じてはいないけど、青い空の中にくっきり丸見えになった巨大な白い山を見ると、神さまのような何かはやっぱりあそこにいるような、気がしてきます。

こんなふうに思うことも、絵の中に現れているか、今のところそれはみつけられません。

家の中でじっとして、自分の絵をながめてみます。

絵の中にあるのは、ここで生まれ育った記憶と、ここでつくられたうその物語と、ここで見た色と光とその景色ばかりです。

このやりすぎ色もビカビカも、描く景色も物語もなく幻の別世界のものでもなく、私の生まれたこの場所のすぐその辺にあるものです。

ただそれは、目に見えるものの一部分だけにすぎなくて、何か足りないような気持ちになることが時々あります。

3年前に、私は、生活の場をここに戻しました。

そうしたら、ここにあるものの目に見えない部分のことを、少しずつ考えるようになりました。それはまだぼんやりとしていますが重い事で、ずっとここにあったもので

でも今の私の絵の中には全くないものです。
私はここにあるものをずっと描いてきたつもりだったのに。
さらに少し遠くに目をやってみれば、目に見えるものだってまだ描いていないものや描きたいものがたくさんあります。さらにもっと先の向こうにも、近くのものの奥深くにも、まだまだ描くものがあるでしょう。
ここは広くて大きく、そして重いのです。
どこかの遠い所へ、行きたいと思う暇もありません。



大人におやつ ー乳ぴたし生いちごー
木工パネル、寒冷紗、ジェッソ、アクリル
150.0 × 150.0 ㎝
2008 年
photo by　宮島　径



大人におやつ ー用なしパイン肉ー
木工パネル、寒冷紗、ジェッソ、アクリル
120.0 × 180.0 ㎝
2008 年
photo by　宮島　径



谷口ナツコ

1968 年　北海道生まれ
1988 年　北海道総合美術専門学校商業環境デザイン学科卒業（現：北海道芸術デザイン専門学校）

個展
2001 年　ギャラリー砂翁＆トモス／東京
2002 年　デザインフェスタギャラリー／東京
2003 年　デザインフェスタギャラリー／東京
2004 年　ヴァニラ画廊／東京
　　スタジオゾーン／東京
2006 年　アンドゾーン／東京
　　デザインフェスタギャラリー／東京
2008 年　ギャラリーテオ／東京

グループ展他
2001 年　トーキョーワンダーウォール作品展　東京都現代美術館／東京（'02）
2002 年　アイソーマルチメディアエキシビジョン　ギャラリー・ルデコ／東京
　　第 21 回安田火災美術財団選抜奨励展　安田火災東郷青児美術館／東京
　　デザインフェスタ　東京ビッグサイト／東京（'03 ～ '06）
2003 年　2 人展　ギャラリー千空間／東京
　　冷と温　ギャラリー MAZE ／東京
　　コラボ@ルデコ　ギャラリー・ルデコ／東京
2005 年　大オークション展　ヴァニラ画廊／東京
2006 年　花を描く　ギャラリー汲美／東京
2008 年　International Exhibition of Contemporary Art　Bologna Fiere ／ボローニャ［イタリア］
　　ART HK08 ー Hong Kong International Art Fair　Hong Kong Convention and Exhibition Centre ／香港［中国］
2009 年　眼差しと好奇心　vol.5　Soka Art Center ／台湾［中国］
　　天欲　MIZUMA&ONE GALLERY ／北京［中国］

ナカノ彩

NAKANO SAYAKA

制作について

日常の中から何かを探し何かを見つけ、何かを感じ、何かを思い出す。何かにリンクさせ、何かを創り生む。より多くのものに感情が動かせるよう感覚を伸ばせるだけ伸ばしてみる。

ギラギラと獲物を狙うように、ランランと何かを求めながら。穏やかな顔で静かに見つめることも少しはできるようになったように思う。

穏やかな時だからこそ見える何かと、ギラギラとした目で見つけた何かをつなげてみたりする。

それは、日常の様々なものを自分のものにする作業。再確認。

光、肉体、植物、風景、水たまりやシミ、地形、グラス、ビニール、布、文字、数字、顔、土、生肉、果実、ぬくもり。

記憶とイメージと今、目の前でキラキラ輝いているものを重ねて、省いて、重ねて、省く。

日常ではっとした何かを描く。その場ではっとする時もあれば、何かをきっかけに、メモをしていた記憶の中からはっとする時もある。

このはっとした何かが伝わるよう、念じる。

意識的に認識する時もあれば、無意識を爆発させる方が好ましいこともある。

無意味な意識も、意味のある無意識もどちらも魅力的だ。無意識を無意識として成立させるには難しいが、無意識の中の偶然、偶然の中の無意味なことを認めて自分にとって必然のものだと意識する。

キラキラする何かを見つけて、その何かを私の形にすること。



glass
キャンバス、油彩、アクリル、ダーマトグラフ、コンテ
130.3 × 162.0 cm
2009 年
photo by 加藤　健



glass
キャンバス、油彩、アクリル、ダーマトグラフ
145.5 × 145.5cm
2009 年
photo by 中田寛也



ナカノ彩

1982 年　神奈川県生まれ
2007 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2009 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展
2003 年　ギャラリーｅシエスタ／東京
2005 年　ギャラリー風／東京
2007 年　ギャラリイＫ／東京

ｸﾞﾙｰﾌﾟ展他
2003 年　GEISAI#3　横浜パシフィコ／神奈川
2004 年　験展　ギャラリー風／東京
2006 年　NPO 法人アイアンドユー主催現代絵画展　Lty932 ／滋賀
武蔵野美術大学展示プロジェクト　独立行政法人理化学横浜研究所／神奈川
SICF 7th　スパイラルホール／東京
Artless　ギャラリー・ルデコ 6 ／東京
2007 年　武蔵野美術大学卒業制作優秀賞展　武蔵野美術大学／東京
DREAM CATCHER　MOGRA ／東京
日本コラージュ　ギャラリイＫ／東京
2008 年　dizzy　switch point ／東京

http://nakanosayaka.com/

平井晴香

HIRAI HARUKA

私の原風景

子供の頃に、ミイラがテレビに映し出されているのを見て、寝袋で寝ている自分の姿を連想したことがあった。その頃から、ミイラに興味を持ち始めたことを記憶している。ミイラには不気味なイメージがあるが、私の中では、ミイラのフォルムのイメージと、「完璧に包まれ保存されている」ということに不思議な感情を抱いていたのだと思う。完璧に包まれて見えない中身がとても神秘的に思え、長い時を経てもそのままの形で残された肉体を包み込んでいる布らしきものに、時空をも超える力があると。

現在、私が描いている「布のある風景」は、人が衣服を着用したというよりは、布が人間の肉体を包み込むといった空間を存在させて、絵画という平面性の中でネガティブな関係を造形化させようとして描いている。人間が衣服を着たとき、瞬間、もう一人の自分に変容する中味などは、単なる身を保護するだけのものではない布の価値を人間は見ている。ヒトは人間として進化を続けるなかで、自然界の現象以外の何らかに、人間の感動や美的感覚の高まりに気付きそれがまた多様な問題意識を生じさせてきたといえる。

これまでの作品は、衣と人間の身体の一部を描き、それに関連する日常的な道具等を画面に嵌め込むように描いてきた。自分（人間）の影の部分を見つめるということの具現化として。また、布（衣）そのものが比喩的に、生きるということの問題点を投げかけるような表現にしていきたい。

日常は、何もしないでいてもどんどん過ぎ去っていくが、自分の心の中では、ある一点に絞り込んだ動かない自分を構築できるようと模索していく。絵画の制作はそのことをはっきりと刻印する為の私のアクションと考えている。



mobile
キャンバス、油彩
194.0 × 162.0 cm
2008 年



dots
キャンバス、油彩
112.1 × 162.1 ㎝
2009 年



平井晴香

1985 年　愛知県まれ
2008 年　愛知県立芸術大学美術学部美術科油画専攻卒業
2009 年　東京藝術大学大学院修士課程絵画専攻在学中

個展
2007 年　ギャラリー安里／愛知
2009 年　ギャラリー安里／愛知

グループ展他
2005 年　九展　　愛知県立芸術文化センターアートスペース／愛知
2007 年　夢広場はるひ絵画ビエンナーレ　　はるひ美術館／愛知

平林幸壽

HIRABAYASHI YUKIHISA

CONTEMPORARY BUDDHISM ART FOR CHILL OUT

私は『CONTEMPORARY BUDDHISM ART FOR CHILL OUT』というコンセプトのもとに制作をしている。70年代半ばに絵画教室を営む両親の元に生まれ、絵を描くは自分にとって日常だった。80年代の冷戦下の東西の対立とその崩壊の中で幼少期を過し、90年代、国外ではアメリカと中東のまるで宗教戦争であるかのような湾岸戦争、国内ではバブル経済崩壊とカルトによるテロや詐欺が横行する中、十代をPunksとして過した。そして9・11の同時多発テロで幕を開けた2000年代に美術の専門教育を受け、その後真言宗の僧侶となった。『大きな物語の終焉』が謳われて久しいが、私には現代の世界はまるでシュミラークルそのものの様に思える。あらゆる国家間、あるいはマジョリティとマイノリティは、様々な利権あるいは仮想敵を作ることで成り立っているかのようだ。私は自らの作品が人々のそのような我執を和らげ、自己の深淵なる心の中にあるものを感じて欲しいと思っている。あらゆる人の心の中には純粋無垢な場所としての『浄土』がある と私は信じている。私の作品がその目覚めへの引き金となることを願い制作している。

社会学者ホミ・K・バーバは、著書【文化の場所～ポストコロニアリズムの位相】で次ぎの様に述べている。『文化の境界線上で仕事をしているものが出会わねばならぬ〝新しさ〟とは、過去と現在がのっぺりと連なった上にのったものではない。それは文化的翻訳という反乱行為としての新しさであるからだ。このような芸術行為によれば、過去は単に社会的な原因とか美学的な先例として呼び戻されるだけではない。過去は新たな相貌を帯び、現在の状況に即した〝あいだ〟の空間として蘇る。それは現在の行為を中断して革新をもたらす。〝過去と現在〟という繋がりは、単なるノスタルジアではなく、生きていくための必要となるのだ。』

人類最古の絵画、ラスコー洞窟の壁画は一万五千年前の旧石器時代後期に描かれた。この壁画は我々のいう〈絵画〉として描かれたのではなく狩猟の成功を祈る儀式に用いられたという。古代インドにおいて宇宙の構成要素は地大（黄色）水大（白）火

大（赤）風大（黒〜紫）空大（青〜緑）からなる五大で構成されると考えられ、密教では曼荼羅思想のもと、この五大と色彩はその色の組み合わせによりマニュエリステックなまでの解釈がなされ、様々な象徴的世界観と儀礼に用いられた。

私は度々曼荼羅で用いられる五色や、浄土、東洋・仏教の伝承的な聖獣である白象・麒麟と、実在する動物の象・キリンのイメージを作品に取り入れ、油彩、アクリル、オイルパステル、ラッカースプレーなどの画材を自由に組み合わせて表現する。それらはイメージそのものの持つ伝承的な象徴主義的意味合いと絵画的な視覚効果と様々な画材を現代人としての感覚で繋ぐ〝あいだ〟の空間を模索する行為であるのだ。



Holt white elephnt in the pureland No. 2
木材、油彩、アクリル、オイルパステル、金属粉、ラッカースプレー
91.0 × 91.0 cm
2008 〜 2009 年





Do you remember the holt white erephant No. 13 Mr.stuphat No. 4
木材、スタイルフォーム、アクリルウレタンスプレー、
アクリル板、油性ペン、オイルパステル、アクリル、油彩
変形 145.0 × 120.0 cm
2008 年

平林幸壽

1976 年　東京都生まれ
2002 年　多摩美術大学美術学部油画専攻卒業
2005 年　大正大学大学院仏教学専攻自主退学

個展

2003 年　Gallery b.Tokyo ／東京
2004 年　Gallery b.Tokyo ／東京
2005 年　Gallery b.Tokyo ／東京
2006 年　Gallery b.Tokyo ／東京
2007 年　Do you remember the Holy white elephant?　トーキョーワンダーウォール都庁 ／東京
Spiritual/Pop の彼岸へ　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
2008 年　Noda contemporary ／愛知

グループ展他

2002 年　多摩美術大学／木嶋・木村クラス展「いえ」　すどう美術館／東京
福沢一郎賞受賞者展　多摩美術大学絵画棟ホール／東京
3 人展「彩遊記」　ギャラリー 52 ／東京
2006 年　トーキョーワンダーシード　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
メイドインカワサキ現代美術賞展　川崎市民ミュージアム／神奈川
トーキョーワンダーウォール作品展　東京都現代美術館／東京
音包～ ototutumi　横浜 ZAIM ／神奈川
2007 年　シンジュクアートインフィニティ　旧マルイシティ新宿工事仮囲い壁面／東京
2008 年　CIGE　中国国際画廊博覧会　中国国際貿易中心／北京 [中国]
ART TAIPEI 2008　台北世界貿易センター／台北 [中国]
GEISAI#11　東京ビッグサイト／東京
These Artists Are Good!　Noda contemporary Beijing ／北京

藤野未来

FUJINO MIKU

It Identifies Me.

①

名もなき人々が、世代をまたぎ時代を超えて繋いで来た物語たち。

それらは、人がこの世に存在するアイデンティティを探ろうとした試みであり、世界と己を認識するための装置となった。

その物語の中で、言葉と現象は今よりもずっと強い魂を持ち、あらゆる出来事に意味とさだめが与えられている。

迫りたいのは、それらの根源に同じようにして通じるプリミティブなものたちの響き合い。

今も世界のどこかで脈々と受け継がれるその流れの、自分はほんの切れ端しにしかなりえないだろうという予感に身を委ねる。

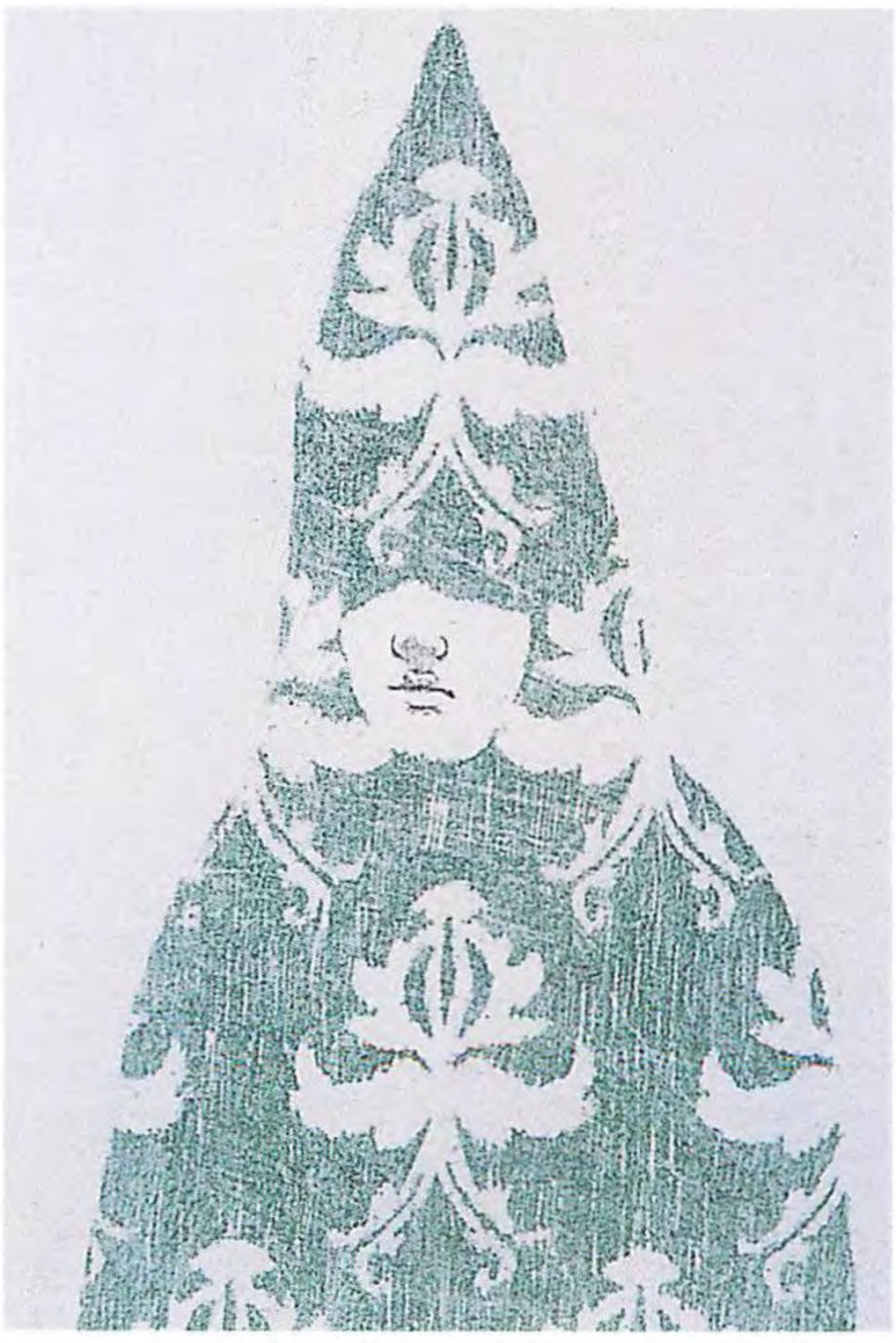
②

私は、自分の体験やら記憶やら、或は日々の中で綺麗と感じたものを作品にしようとすることに関心がありません。もちろん、作者本人の感情の起伏が作品上に現れ、作者が美しいと感じるままに素材を使うのは、物を創る上で重要な生理です。日常が自身を介して作品に昇華されることも自然な流れだと思います。しかし、常にその反対側に視線を投げて求めていかなければ限界を超える瞬間は訪れず、自分で自分の模倣をしているに過ぎない、結局は制作が日常に還元されてゆくだけではないかと、感じることがあるのです。

古いものの中には、誰が語ったのかわからない、忘れられた作者の物語や伝説があまた登場します。彼らの名前こそ消失しましたが、その感受性は未来へと普遍的に受け継がれてゆきます。自分にとって美術をつくることは、日常や個人という段階を超えた名もなき行為であれば良いと願うのです。



TOP tree
紙、パステル、鉛筆
27.0 × 22.0 ㎝
2009 年
photo by　柳場　大



TOP tree（部分）
photo by　柳場　大

森
紙、鉛筆、色鉛筆、パステル
59.0 × 51.0（全体）
2009 年
photo by　柳場　大









藤野未来

1982 年　東京都生まれ
2004 年　多摩美術大学美術学部絵画科卒業

個展
2006 年　サイレントムービー　トキ・アートスペース／東京
2007 年　The Darkest Sequence　トキ・アートスペース／東京
　　The Darkest Metaphor　Gallery 惺／東京
2009 年　Gallery 惺／東京（吉祥寺）にて 7 月 11 日～ 8 月 2 日迄開催予定

グループ展他
2003 年　二人展「低空飛行」　Gallery 惺／東京
2005 年　定点 05　Gallery 惺／東京
2006 年　THE LIBRARY 2006　Gallery Art Space ／東京
2007 年　HORS LIGNE　Gallery 惺／東京

本間　洋

HOMMA HIROSHI

よくかんがえていること

すべからく生物は外部から何かを摂取との両立。これこそが私の創作をする上で
し、再び外部に放出する循環を繰り返さなの構成上の基本となっている。
くてはならない存在である。そして多くの
生物はそれを他の生物を捕食することで　基本的に人間同士の関係もこれと似たよ
行っているが、その大半は基本的に強く大うなものではなかろうか。人間もカエルも
きなものに対するものでは本質的にはそれほど違いはないのかもしれ
ある。ない。

しかし、力の強い捕食者が力の弱い被捕
食者よりも程度の高い存在かといわれれ
ば、当然のことながらそのようなことはな
い。

例えば、映像で見た一匹のカエル。彼（彼女？）は自分より弱い者にはどこまでも攻撃的になり、追い掛け回し、その命を奪って丸飲みにしてしまい自分の命を永らえさせようとする。しかしその反面、自分より強い者に出会えば全速力で走り出し、逃げ切れなければ身体を膨らまして威嚇をする。

結局捕食されてしまったそのカエルの弱い者への陰惨さと強い者への間抜けさや浅薄さ、どうしようもなさを含めたユーモア



毎日
パネル、テンペラ、油彩
25.5.0 × 41.0 ㎝
2008 年



しあわせならばそれでいい
パネル、アクリル、テンペラ、油彩
100.0 × 100.0 cm
2008 ～ 2009 年



本間　洋

1972 年　神奈川県生まれ
1996 年　東北芸術工科大学芸術学部美術科洋画コース卒業
1998 年　東北芸術工科大学大学院芸術文化専攻西洋画コース修了

個展
2002 年　ギャラリイＫ／東京
2004 年　ギャラリイＫ／東京
2006 年　知性の触覚 2006　それぞれの他者　　ギャラリイＫ／東京
2009 年　ギャラリイＫ／東京（銀座）にて 9 月 14 日～ 19 日迄開催予定

グループ展他
1998 年　第 16 回伊豆美術祭絵画公募展　　伊東市観光会館／静岡
1999 年　ACRYL AWARD 1998　　ザ・グラウンド／東京
2001 年　第 8 回リキテックス・ビエンナーレ　　青山スパイラルガーデン／東京
2003 年　アートで ZOO 展　　秋田県立近代美術館／秋田
2004 年　I'm here 展　　せんだいメディアテーク／宮城
2006 年　新世代の小品展 '06　　ギャラリーなつか b.p ／東京
2007 年　平成 17-18 年度　文化庁買上優秀美術作品披露展　　日本芸術院会館／東京
2008 年　新世代への視点 2008　　ギャラリーなつか b.p ／東京

森智沙帆

MORI CHISAHO

制作について

様々な場面で写真を撮ってきた。中学の卒業式に友人と行った浜辺で、何度も涙を流した予備校のアトリエで、家族でいった旅行先で、私達はことあるごとに写真を撮るのだ。

それらは、何かの記念としてあり、また些細な出来事の記録として鮮明にそのときの時間を焼き付けている。

時に友人や家族と写真を眺めながら、もう通り過ぎてしまった日々を懐かしんだりもする。

写真にはそういった力があるものだ。

けれど記憶はなかなかそう上手くはいかない。確かに存在していた時間は記憶としてその経過と共に曖昧になり、感覚や感情、色や形、質感や線に姿をかえていく。

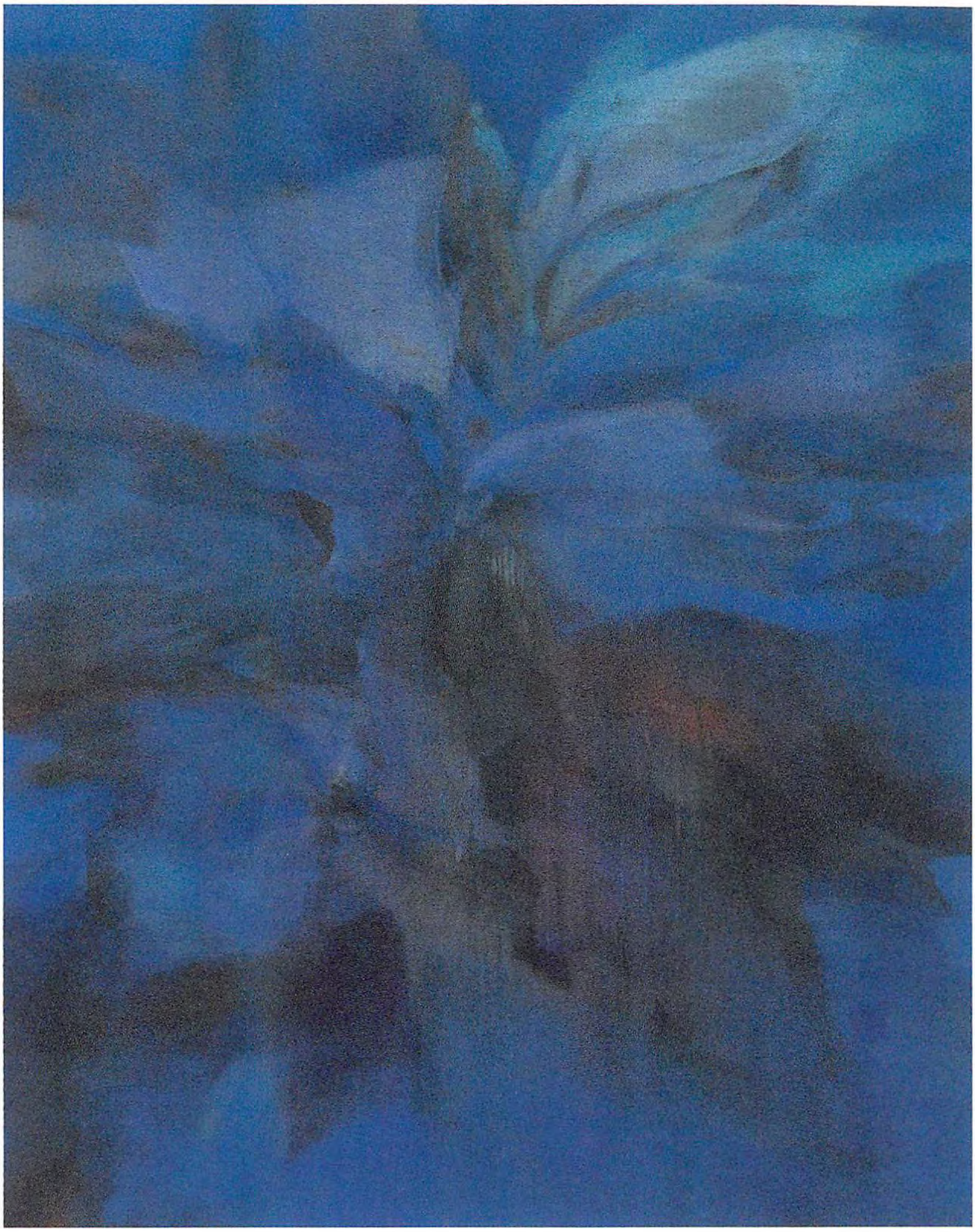
それらは決して鮮明に何かを伝えるものではないのかもしれないが私という人間をしっかりと形成してきたものたちだ。

写真はその鮮明さによって今という時間を過去へと変えてしまうけれど、記憶は私に帰属し続けることによって過去を今という現在に呼び戻し続けている。

過去と現在を共にした私の記憶は、画面に向かうことでより多くの過去と現在を介在させ、開かれた記憶、絵画として私の前に再度、現れる。きっとそれは未来なんじゃないだろうか。

過去と現在を介在する場が絵画であるなら、私と誰かの間に私の絵画が介在し、いつかもう通りすぎてしまった日々を想いながらも今此処を思い、未来へと投射していきたい。

絵画にはそういった力があるものだ。私はそう信じている。



断続的な情景 - No. 3-
パネル、油彩
227.0 × 181.0 cm
2008 年
photo by　村上真之介



UNTITLED
パネル、油彩
182.0 × 227.0 cm
2008 年
photo by　村上真之介



森智沙帆

1982 年　千葉県生まれ
2008 年　東京造形大学卒業

グループ展他

2004 年　continue art project　上越市大島地域／新潟（'06 ～ '08）
2005 年　『おかあさんお母さん』展　ギャラリー J² ／東京
2007 年　continue art project　時間空間ねこじゃらし／東京
2008 年　Sai 展　Zokei ギャラリー／東京
ワークショップ報告展『風景／画　うまれるとき一見晴らしフレームで描こうー』　青梅市立美術館市ギャラリー／東京
関連企画『ポリフォニー　Bild ／画　うまれるとき』展　吉川英治記念館／東京

安田　悠

YASUDA YU

時間の中で

時間と空間の歪みからなるものを見てみたい。

そのときあったはずのものが消え、なかったものが現れることで、そこには想定しえない歪んだ空間が生まれ、別の新たな時間が流れる。

差し引きされた時間軸の中では色々なものが曖昧に存在している。

空だったり、水だったり、木だったり、地だったり、家だったり、人だったり、浮遊する何かだったり、キラキラしたものだったりが、何の物語性もなくただゆっくりと蠢き、うつろい、揺れながら重なり合って。

そんな白昼夢にも似た空想の時間を永遠の一瞬として留める。

それは、記憶と知覚とを繋ぎ合わせ、描いては消してを繰り返す中から生まれる必然性と偶然性との連鎖反応の結果である。

そうして対面する世界は、きっとまだ自分自身も知りえない歪みを伴った時間と空間との遭遇ができると信じている。



Near sky
キャンバス、油彩
130.3 × 80.3 ㎝
2008 年
photo by　Ken Kato

Diaphanous
キャンバス、油彩
162.0 × 162.0 cm
2008 年
photo by　Ken Kato





安田　悠

1982 年　香川県生まれ
2005 年　福岡教育大学美術科卒業
2007 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展
2007 年　GALLERY b.TOKYO ／東京
2008 年　トーキョーワンダーウォール都庁 2007　東京都庁／東京
TWS-EMERGING 2008　トーキョーワンダーサイト本郷／東京

グループ展他
2007 年　ART AWARD TOKYO 2007　行幸地下ギャラリー／東京
トーキョーワンダーウォール 2007 作品展　東京都現代美術館／東京
TOKYOEYE 01　DAIMARU TOKYO ART GALLERY ／東京
2008 年　VOCA 展 2008　上野の森美術館／東京
If you're happy, clap your hands-Japanese artists born in 80'　Andrew James Art ／上海 [中国]
ゼロの庭　MA2 GALLERY ／東京
2009 年　TOYOTA ART COLLECTION　鞍ヶ池アートサロン／愛知

http://www.yu-yasuda.com

ロバート プラット

ROBERT PLATT

ランドスケープの再定義

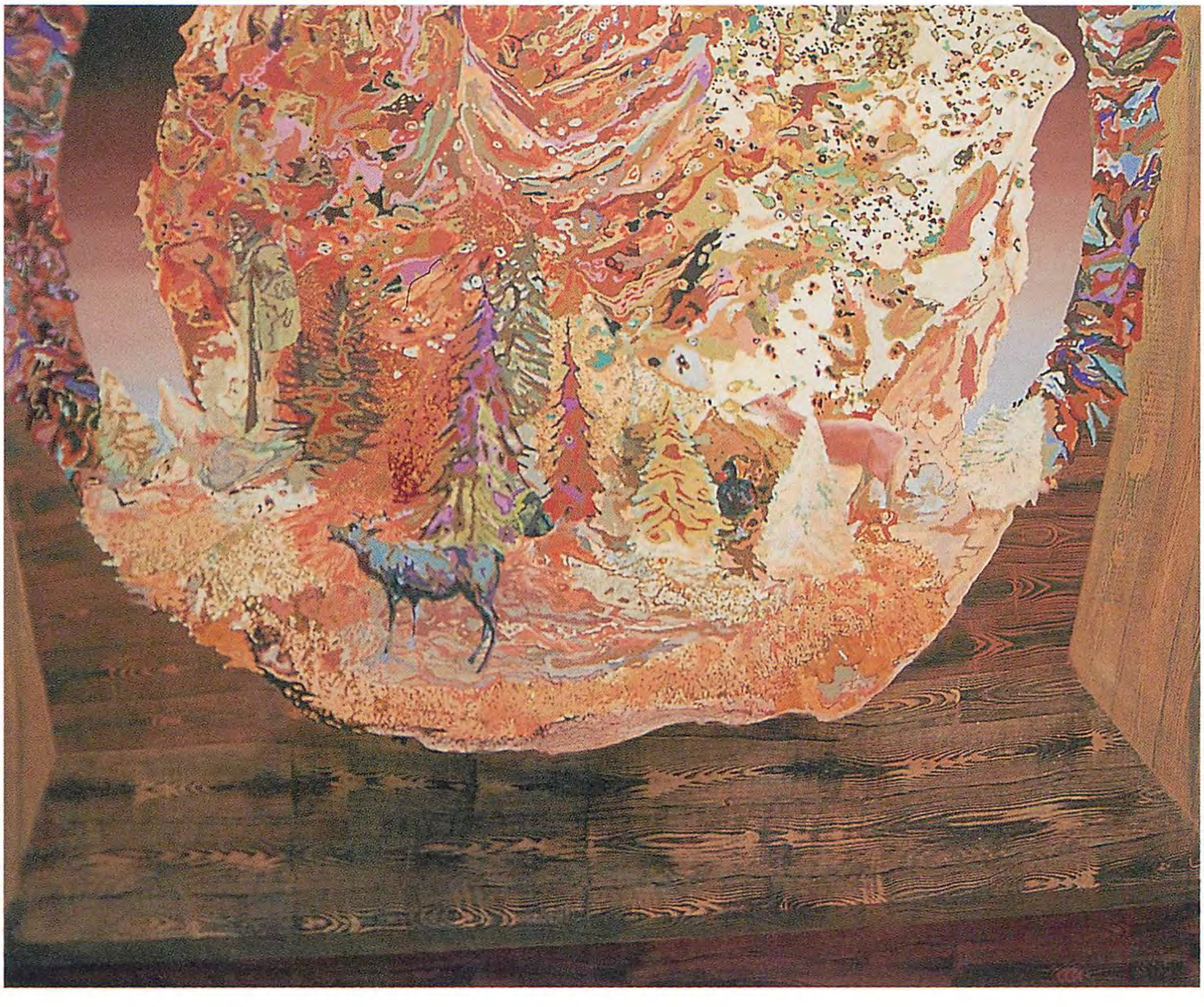
僕の作品の特徴は、多種多様なモチーフを含む構成された風景画法にあると思います。

モチーフはあるがままの自然を意味しており、例えば、神獣（その土地の主のような動物）、森、生い茂った葉、狩人などが神秘的な領域に溶け込んでいて、そこでは内側と外側、自然のままであった過去と超自然現象を対比させ、自然と人工的な物が同時に存在しています。

これらのテーマを、完璧に図式化した独自の風景ビジョンの中で展開させていきます。

僕が興味を覚えるのは、現代の文化的状況を反映した心象風景で、とりわけ自然対人工的なものに関することです。

そのコンセプトでやろうとしているのは、我々が存在する空間でのより直感的でミステリアスな体験を呼び起こす、心に残る原風景を作り上げるということなのです。



Alpine Hunting Diorama（ii）
キャンバス、油彩
130.0 × 162.0 × 3.0 ㎝
2008 年



Hunting Party / Feast
キャンバス、油彩
91.0 × 117.0 × 3.0 ㎝
2008 年



ロバート・プラット

1974 年　ロンドン（イギリス）生まれ
1996 年　Trento 美術大学卒業［ノッティングハム - イギリス］
2001 年　Royal College of Art 大学院修了
2008 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程絵画専攻油画領域　単位取得満期退学

個展
2003 年　City in Bits Studio J ／大阪
2008 年　Huntorama Houldsworth Gallery ／ロンドン［イギリス］
2009 年　Huntorama part II　　Muzz project space ／京都

グループ展他
2001 年　London Calling　　RM Art ／エッセン［ドイツ］
2003 年　Yes! I am Far From Home　　The Nunnery ／ロンドン
2004 年　Incidental Sublime　　マッズプログラムスペース／京都
2005 年　Paintings　　タカ・イシイギャラリー／東京
Practically Sublime Els　　Hanappe Underground ／アテネ［ギリシャ］
2006 年　Kito Kengo + Robert Platt　　ギャラリー小柳／東京
VOCA 展 2006　　上野の森美術館／東京
Dynamic Entropy　　Houldsworth Gallery ／ロンドン
New London Kicks 2　　Wooster Projects ／ニューヨーク［U.S.A.］
2007 年　ART AWARD TOKYO 2007　　行幸地下ギャラリー／東京
Tamed & Framed Harris　　Museum & Art Gallery ／イギリス
Tech-Mac-Mayucom　　明日館／東京
Chinaware in Translation　　Bice Restaurant ／東京
2008 年　Gallery Artists　　ギャラリー小柳／東京
Twenty　　Dazed & Confused Gallery ／ロンドン

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊 2009

発行日　2009 年 6 月 30 日発行
定　価　1,000 円（本体 953 円）
発行所　ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋 2-18-4
発行人　吉村信夫
編　集　倉田妙子

holbein